

一般財団法人日本アジア振興財団（JAPF）

2016年春期インターンシップ論文集

期間：ベトナム及びカンボジア 2016年2月18日（木）～2016年2月29日（月）
カンボジア 2016年2月28日（日）～3月6日（日）

対象国：ベトナム社会主義共和国及びカンボジア王国

参加人数：43名

男女割合：男13名、女30名

日本国籍者：43名

参加大学：新潟大学、新潟国際情報大学、京都大学、立命館大学、龍谷大学、関西外国語大学、同志社大学、甲南大学、武庫川女子大学、大阪大学、神戸女学院大学、神戸市外国語大学、神戸大学、岡山大学、名古屋大学、山梨県立大学、徳島大学、北東京農工大学、九州市立大学、久留米大学、長崎国際大学

帰国後の活動：（関西での修了式及び事後研修会）

日時：3月16日（水）15：00～16：00

場所：在大阪カンボジア王国名誉領事館、大阪市

（福岡での修了式及び事後研修会）

日時：3月25日（金）14：00～17：00

場所：博多 リファレンス駅東ビル



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

発行：一般財団法人 日本アジア振興財団学生委員会

【レベルアップした自分～JAPFのツアーを通して～】

甲南大学法学部 3年生

このツアーで、今まで生きてきた中であまり使ったことのなかった「思考」を動かすことが出来ました。考えたことも無かったことを考えるのは本当に難しかったです。私が思っていたカンボジアは飢餓の国だったけど、実際見てまったくそうでは無かったです。日本に比べると職業の選択は少ないし、収入も少ないです。まだまだ生活に苦しんでいる人は沢山いました。それを日本の民間業があらゆる分野から支援をしているのはすごく関心を抱いていました。実際現地に行くと日本の企業、メーカーも多く、教育や医療の質を上げるといったソフト面でも支援に力を入れていました。だけど私個人として感じたことですが、日本はカンボジアに支援し過ぎているのかもしれない。カンボジア国という国独特の文化が無くなるのではないかとか、言葉は悪いかもかもしれませんが「侵略」しているようにも感じました。支援するのも大切だけど、支援し過ぎずカンボジア独特の文化を壊さず調節した支援が必要だと考えました。それに因んで私が感じたのは現地の人々の幸せです。本当に心の底から「幸せ！」と思えるのは日本よりカンボジアなのかもしれません。人それぞれの幸せの価値観は違うけれど、私が一番幸せと思えるのは家族といる時です。通勤時間2時間もかけて仕事に行き、夜遅くまで働き、子供の寝顔しか見ていない家族に比べると、家族みんなが近くにいて、同じ時間に同じことをして、1つの机をみんなで囲んで食事をする。そんな家族の方が幸せなのかもしれない。ツアー中にいつもバスから見ていた景色、カンボジアは豊かな国だと思いました。何にもとらわれず、ただ生きているだけで笑えて幸せな人たちばかりでした。それを見て、私は今まで当たり前前に家族と過ごしていた時間を大切にしようと思いました。毎日生きていることが当たり前ではない。日本人は本当の幸せが何なのか忘れていると思いました。普段当たり前だと思って考えなかったことを考えたことが今回のツアーで私がレベルアップした姿でした。

今後12日間で得た知識を生かすも殺すも自分だと思えます。私はこの学んだ知識を生かして色々な物事を色々な角度から見てもっと視野を広げていこうと思います。ツアーで出会えたメンバー、ガイドさん、現地の人々、この機会を与えてくれた家族に感謝したいと思います。

【ベトナム・カンボジアを五感で感じる】

関西外国語大学 3年生

私がこのツアーに参加する前にベトナム・カンボジアに対して抱いていた印象は、まだインフラや環境整備が整っていない発展途上国であるというイメージが強かったです。実際、そのイメージはツアー後の今を振り返って大きく変わりました。ホーチミン、プノンペンなどの主要都市ではホテルやビルなどが乱立しており、夜になると電飾の明かりが様々に光り輝いていました。こんなに活気があるのにどうして発展途上国なのだろうか。この疑問をこの12日間で解消することができるのだろうかとの奥底で考えていました。

カンボジアに焦点を当てると当時のポルポト政権下での大量虐殺による急激な労働力の減少が大きく作用していることが日数を重ねるごとにわかってきました。トゥールスレン収容所博物館やキリングフィールドを訪れるにつれて知識人や文化人、さらに眼鏡をかけているといった理由だけでも殺害していたことが明るみになりました。もしこの層が殺されていなければカンボジアは今よりもっと発展していたでしょう。孤児院、病院、日本語学校と色々な施設を巡ったが、関連して言えるのは自分たち日本人は木を見て森を見ていないということだ。口を開けば援助金援助金と形だけの「支援」を誇示し、現場の人たちや特に子供たちにはほとんどといっていいほど何も供給されていないのが現実である。帰国後、船戸与一さんの「夢は荒れ地を」という本を手にとってみた。カンボジアの政府高官は海外からの援助金を食べ物にしているとの記述があったが、あながち間違いでもないのだろうと思った。孤児院の子供たちは自分たちを見つけると間髪入れずに腕の中に飛び込んできた。外国人でクメール語が話せる訳でもないのにだ。人見知りなどどこ吹く風で、こうしたこと（観光客のように孤児院に出入りする）が毎年のように起きているからか彼ら彼女らも慣れているのだろう。日本語学校では生徒たちの日本人に対する厚い尊敬と憧憬の感情が入り乱れているのが手に取るように分かった。「まじめ」で「礼儀正しい」が行き過ぎた結果が、全員が大声で一糸乱れずに挨拶しなければならないといったことにつながったのだろう。農村部では逆に、私が思い描いていた純朴な子供たちの笑顔を見ることができた。個人的には孤児院の子供たちよりも自然で好感が持てた。ある種、孤児院の子どもたちはビジネスライクの笑顔のような気がしたからである。

この12日間を通して、ほかのメンバーとの交換日記やディスカッションをして自分の考えをより深めることができたし自分にはない考えだったり意見だったり聞くことができたので貴重な時間を過ごすことができたように思う。私たち日本人がこれからベトナム・カンボジアとどのように付き合っていくのかすぐに答えを出す必要はないだろうが、自分たちが何を思い、どのように感じたのかをこのことを知らない人たちに伝えて、意識を共有していくことが重要なのではないかと思う。木ではなく森を、主観ではなく客観で物事を捉えられるような人間になりたいと思う。

【ツアーとこれからの自分】

京都大学法学部 4年生

本ツアーの収穫は、「自己の改善点の発見」であった。

そもそも、私が JAPF のツアーに参加した理由は、「日本人の同世代の学生と一歩踏み込んで話したい」、というものだった。だからこそ、海外に行くにも語学研修ではなく、日本語で学ぶことのでき、参加者が大学生であるツアーを選んだ。ディスカッション等、真面目に話すことができる場があるのも魅力的であった。

実際ツアーに参加して、当初の目的通り、普段友達とするよりも、広く深い会話ができた。一方で、反省や学ばされることもあった。以下、2つの観点から述べていく。

1 点目は、普段と異なる立ち位置という観点から、集団で議論する時の態度を学んだ。今まで、コミュニティの中では単なる団体の一員として活動することが殆どで、リーダーシップをもって行動することが少なかった。しかし、今回は4回生ということも相まって、観光や初盤のディスカッションではリーダーのさせて頂いた。この立場になって一番感じたことは、リーダー(最上級生)であるというだけで、自分の発言に重みが出てきてしまう怖さである。議論を回す側になった時は、円滑な議論を心掛けつつも、自分の意見の出し方には留意しなければならないと思った。逆に、自分がリーダーでない時も、自分が議論を回す側だったら、ということを一隅に置いて、状況に応じて時に active に、時に議論をまとめる発言をしていこうと思う。

2 点目は、人との出会いという観点である。同世代の学生であるツアーメンバーは、自分にはないものを持っていた。話し方が上手な人からは、伝えたいメッセージを念頭に、相手に伝わる着地点を意識すること。誰とでも仲良くできる人からは、固定の自分に拘り過ぎず、色々な自分を楽しむこと。人の意見を拾い上げるのが上手い人からは、知識の in put の時点で out put を意識すること。これらを学んだ。

今回のツアーで発見した、自分の実力不足や、他人の喉から手が出るほど欲しい能力。落ち込むこと、羨むことに終始せず、できることから着手する。自分が変わることを恐れずに、進んでいきたい。

【今カンボジアに必要なこと】

岡山大学工学部 2年生

私がこの企画に出会ったきっかけは、大学のインターンシップ用の掲示板に貼られていたポスターを見たことが始まりでした。もともとアジアが好きで大学企画の短期留学やワークショップに参加していました。しかし、学外の企画のツアーに参加するのは初めてでした。最初に送られてきた資料にはお金の振込先、保険ぐらいしか書かれておらず、ホテルの名前もツアーの日程も書かれていませんでした。JAPFも聞いたことがないし、高いお金も払っているから詐欺じゃないかと当日までとても不安でした。ここは改善すべき点だと思います。

不安な当日からカンボジア7日目まで予想以上に得たことは多かったです。日本のたいいていの人がカンボジアは“貧乏な国”だと思っていると思っています。実際、私がカンボジアから体調が悪いま帰国すると、母は“カンボジアは衛生状態が良くないからだ”と言っていました。私は母の発言に少し悲しくなりました。カンボジアは貧しいというイメージを植え付けてしまった気がしたから。確かに衛生状態はまだよくないと思います。しかし、それは日本人の観点であって、本当は日本人が免疫を持っていないということが原因でもあると思います。

私がカンボジアに行く前は、このような考えは出来なかったでしょう。倉田さんやアキ・ラーさん、たくさんのカンボジアの人を見て、話を聞いて、触れ合って考えが変わりました。貧乏だけど不幸せではない、または、そうとは限らない。ポルポトや内戦があってゴーストタウンと呼ばれた土地もあるが、今では市街地になっていたり、有名な観光地になっていたりしていました。そこで買い物や食事をしたが、カンボジアの人たちの笑顔があふれている。それだけでも幸せだと感じました。“人それぞれ幸せの基準が違っていいじゃないか”と倉田さんはおっしゃっていました。そのお話を聞いてから“日本人”の観点から抜け出すことができたのだと思う。

しかし、やはりカンボジアはまだいい意味でも、悪い意味でも発展途上だと感じました。その理由に観光面と職の面、衛生面の三点があると思います。まず観光面では、アンコールワットには年配の観光客が多かったが、急な階段に手すりはなく、暗い遺跡には明かりがない。手すりを付けたら貴重な電気をつけるのは金銭的に厳しいと思うが、急な階段があることを示す看板や急な階段のサンプルを作った方がよいと思いました。また、観光省の方はアンコールワット以外の湾岸部や北東部も推したいと言っていました。写真はすごくきれいで南国リゾートのようでした。私は行く前にカンボジアについて観光本とネットで調べたが、全く書いていなかったのもったいないと思いました。職の面では、働きたい人がいるけれど職が足りていないということです。イオンを作る土地と建設技術があるなら工場の方が今のカンボジアに必要なだと思います。イオンは富裕層しか行けないうえ、そこまで客が多くなく、働くためにはある程度の知識が必要な場である。知識のある日本の企業なのになぜそこに気づけなかったのかと疑問に思いました。今カンボジアには“買う場”よりも“稼ぐ場”の方の必要性が高い。衛生面では、最初生野菜がダメって言われてびっくりしました。他国に行った時水道水はダメと言われたことはあるが、生野菜に関しては初めて聞きました。食事の時、サラダが普通にコースの中に含まれているのに食べられないのが辛かったです。そのサラダは捨てられるのだと思うとさらに辛かったです。雨季に雨が降らなくて農家が厳しい状態なのに…。生野菜を食べられないならせめて事前にお店にサラダなしで伝えて欲しかったです。

実際カンボジアに行って分かったこと。一番は本当のカンボジアを知れたことだと思います。日本にいては、カンボジアは寄付金だけで成り立っている貧しい国というイメージから抜け出せなかったでしょう。本当は、貧富の差があり、今その差を埋めるためにも雇用の場が必要な国が正しい。

私はまだ学生なので、十分な寄付やボランティア、企業してカンボジアに雇用の場を作ることにはできない。私の学んでいる学問に関連してカンボジアへの協力を考えるなら、ペットボトルに石や布を詰めて汚染水から飲み水を作る方法を伝えることが考えられます。これなら材料はカンボジアにほぼあるし、子供も大人もできる。また、JAPFのツアーの参加者でもできる。JAPFのツアーにこのような海外協力を盛り込んで見てはどうだろうか。

最後に、このツアーを企画してくれたJAPFの方々に感謝したいです。学生に優しい値段であったので参加しやすかったです。前に書いたようにJAPFのツアー改善すべきところがあると感じました。

カンボジアとJAPFの今後のますますの発展を願います。

「スタディツアーで気づいたこと」

徳島大学工学部 2年生

12日間を通して、私は無知だなと何度も気づかされました。日本に住んでいながら抱く戦争や発展途上国のイメージと実際のものとは全然違いました。また、事実を知ったところで、平和ボケをしていた私には事実を受け入れきれないことも多々ありました。私たちは日本で過ごしていて、平和の大切さや、幸せとは何かを見落としていたのだなと感じました。

実際のカンボジアやベトナムは私が思っていたよりも活気にあふれていて、現地の人々は笑顔で幸せそうでした。今まで私は無意識のうちに発展途上国を客観的に上から目線で見てしまっていました。例えば私は勝手に、「発展途上国は食べ物や学校が足りないのだろう。」と決めつけていました。しかし実際に目の当たりにしたカンボジアの通学率や食料自給率の高さにとても驚きました。実際は通学率も食料自給率も日本以上でした。教育にしても、トレードにしても、物の量は足りているけれど、質が悪いということを学びました。この事実を知らない日本人は結構多いのではないかと思います。私がカンボジアの現状を変えることは出来ないけれど、少しでも力になれるとしたらこのツアーで知った事実を日本に拡散していくことだと思います。そして多くの人にカンボジアに対する興味を持ってもらおうと思います。

また、ベトナムやカンボジアで起きた戦争についても日本人に知ってもらいたいと思いました。私はベトナムの南北戦争やカンボジアのポルポト政権を学校であまり習った覚えがありません。ツアー前の事前学習で初めて知って、正直に言うと「悲惨な跡地を見たくないし、わざわざ行きたくないな。」と思ってしまいました。普通の観光だったら行っていませんでした。しかし、実際に行ってみて良かったと思っています。なぜなら各国の過去を知ることが、なぜその国がこのような現状に陥ったのかということや、現地の人々の考え方や国民性を理解するうえで欠かせないことだったからです。また、南北戦争に日本も関与していたことや、ポルポト政権のような独裁は各国で起こりうることだと知りました。これからはこのツアーで学んだことを活かして、戦争を繰り返さないことや、平和の貴重さや大切さを広めていこうと思います。

【支援するとは？】

同志社大学経済学部 1年生

カンボジアはいつになったら発展途上国と呼ばれなくなるのだろうか？地に足のついた支援ができていないから非効率な支援状態になってしまっているのではないかな？では、どうしたらいいのか？それが私の問だった。この研修で考えたことが二つある。

一つ目は共生とは何かということについてだ。私は、現地に赴く前は、障がい者、貧しい農民、ゴミ山で生活する人、道端で物乞いをする人など、集団の風紀を乱し、治安を悪くする少数者は切り捨てられ、新しい家と仕事を与えられれば問題は解決されると思っていた。底辺の底上げをすること、それが最も効率よく低コストにカンボジアを改革する手段であると思い込んでいた。確かにこのやり方で国自体は前進するだろう。しかし、彼らは本当に軽視され、切り捨てられる存在なのだろうか。違った。彼らはそこで生きていた。私たちが目を覆いたくなるような貧しく、衛生管理の行き届いていない環境で生きるために必死で仕事をして家族を養っていた。衝撃的だった。彼らはカンボジアの今に生きている。そこが故郷で生きる場所だった。それを無視して開発することは支援ではなかった。彼らの存在を否定せず共生し、今のカンボジアと未来のカンボジアをつなぐ支援とは何かをこれから考えていきたい。

二つ目はビジネスの大切さについてだ。今回はカンボジアのどこに行ってもお金が回り、経済が動いている形跡がなかった。この点にベトナムとカンボジアの大きな差を感じた。カンボジアの「支援慣れ」。問題は私たち先進国にもある。投資の仕方、経済のまわし方をきちんと教えていないのではないのか。「魚をとってあげるより魚のとりかたを教えたい」この研修で一番印象に残った言葉である。カンボジアが先進国の支援の手を離れたとき、教育でも医療でも、どんな分野においても自分たちで利益を出さなければいけない。何においてもまず教育だった。しかしカンボジアは内戦の影響で知識人の数が少なく、人が人に教育する当たり前の構造も弱く、基礎的な部分での欠落が大きい。そこが他の発展途上国との大きな差であり、発展に時間がかかっていた理由だと感じた。少しずつでも今の教育面での支援は継続すべきである。また、日本も自分が利益を出す支援を行うべきだ。自国、自社の利益を求めながら、それが結果的に支援につながるという双方にとってメリットのある関係でなければこの先も支援を続けることは難しくなる。また、今からビジネスパートナーとして途上国と対等な関係を結ぶことは、この先の国益、企業の利益としても多大なものになると考えられる。カンボジアにおいて重要なのは、教育面、経済を回すビジネス面での支援である。

私の感じた二つのことには矛盾が生じる。しかし、どちらも譲れないことだ。効率性と非効率性の間に発展と支援はあるのだと感じた。この研修をふまえて、自分のいち日本人としてのあり方、いち経済主体としてのあり方についてより深く考えていきたい。普段の生活では当たり前すぎて見落としがちな大切なことに気づかせてくれた研修、またここに連れてきてくれた周りの人や両親に感謝したいとおもう。

【ベトナム・カンボジア研修を通して感じたこと】

立命館大学政策科学部 4年生

本春季ベトナム・カンボジア2カ国研修を通して感じたことをまとめると次の3つになる。

1. 歴史を知る大切さ
2. 「なぜ今こんな状況を選んだのか」という疑問や興味を持つことと、それを探求していく気持ち
3. 自分たちが収めた税金や自分たちが取った消費行動がどのように巡っているのか、に対して、意識を向けること

1つ目の「歴史を知る大切さ」であるが、ベトナム・カンボジアでは内戦においても、経済問題においても、問題の構造が根深く、複数の諸問題が複雑に絡み合っていると感じたことにより、歴史を丁寧に追っていく必要があると考えた。例えば、ベトナム南北戦争やポルポト政権による大虐殺は、解きほぐして考えないと一面的な解釈をしかねない戦争であるし、ベトナムとカンボジア間における経済発展の格差においてもその原因がシンプルに構造をしているとは言えないためである。

2つ目の「『なぜ今こんな状況を選んだのか』という疑問や興味を持つことと、それを探求していく気持ち」であるが、特にカンボジアや市民に対する日本など他国からの政府や民間からの支援に関して、その支援は本当に必要なものなのか？適切なものなのか？という問いかけを行うことである。日本など先進国からやってくるボランティアの中には、カンボジアの教育問題に心を打たれて学校という箱ものを建設する人や団体があるが、箱ができたからといってカンボジアの教育問題の原因である教師不足やそもそもの教育への意識の希薄さが改善されるわけではなく、せっかく建設された学校が使われないという事態が起きたり、あるいは現地民にとっては生活用水が足りているにも関わらず井戸を掘り、結局使われなくなり枯れてしまう事態もある。これは一例であるが、私たち先進国側の人が見て、「ここが足りない、遅れている」と感じ、支援しようとしていることが長期的な視点で見た際に本当に現地民にとって有用であるものなのか調査・熟考の必要がある。

3つ目の「自分たちが収めた税金や自分たちが取った消費行動がどのように巡っているのか、に対して、意識を向けること」であるが、例として JICA の支援としてどのような使途でお金が使われているのか、あるいは私たちが日々口にしている食料品はどのようなルーツを持っているかを意識することである。よく日本で石鹸やお菓子などに含まれているパーム油はカンボジアのアブラヤシから取れるが、その生産には農民の奴隷的な労働がある場合も考えられる。また、観光業が巨大産業であるカンボジアでは、土産物屋にて売られているモノたちはどこか使い捨てのような、目先のその一瞬の利潤（売り手、作り手、あるいは買い手にとって）しか得られないようなものが多いと思った。大量消費する私たち海外旅行者に合わせて、簡便でそれほど付加価値のないものを大量生産する構図が持ち込まれて、そのような市場が出来上がってしまった結果のように思った。このように私たちの日々の消費行動で一国の農業や観光業といった産業の動きを変えたり、市場をつくったりしている、そしてその動きは私の行動で変えていけるのだということを忘れてはならないと感じた。

以上のことから、私たち生活者／消費者がすべきことは、偏見を持たずに中立的な目で事実を知ろうとする・現状やその背景・歴史を適切に理解する。なるべく事実／事象を正確に押さえる。歴史を知る。その上で深く知り、考えてから自分の意見を持つ。そして行動することであると思う。これらは日々の生活の中で気を付けていきたい。

【カンボジアで感じたこと】

山梨県立大学国際政策学部 1年生

私はカンボジアとは、地雷もあるしとても貧しい国というイメージをもったままこのツアーに参加しました。しかし、このツアーを通してカンボジアで1日1日を過ごして行くたびに私のイメージは間違っていたということに気づかされました。

確かに、カンボジアは日本に比べて貧しい国だと思います。私たちにはとても考えられないような生活をしている人たちがいることは事実です。しかし、カンボジアの人たちはカンボジアに生まれたことや、その生活をしていることが不幸だとは思っていないと感じました。なぜなら、カンボジアの人たちの笑顔が素敵だったからです。いつでも笑っていました。とくに孤児院を訪問した時、国籍も言語も違うこのだれかわからない私たちに満面の笑みで走って向かってきてくれたことが何よりも印象に残っています。子供たちと交流をしていく中で、この子たちは親と一緒に暮らせていないけれど、親と一緒に暮らすこととはまた別の幸せを孤児院で感じているのかもしれないと思いました。きっと、あの子たちの笑顔を見なければ、親がいないかわいそうな子たちだと勝手に不幸だと決めつけたままだったに違いありません。しかし、あの笑顔を見てその考えが間違っていたと気づくことができました。私たちにとっての幸せと、カンボジア人にとっての幸せは感じ方が異なっています。そして、私たちが幸せと気づけないような些細なことにも彼らは気づいているのだと思いました。

そんな中、私がツアー中毎日感じていたのは「貧富の差」です。日本とはレベルの違う貧富の差でした。バスで走っているだけで景色ががらりと変わり、そこにいる人たちの服装や体型も変わっていききました。私たちがいつも通りの服装や持ち物で歩いていたら恨まれるのではないかと思ったこともあります。私たちにとっては普通でも、私たちが裕福に見えるような場所も多くありました。貧富の差はそういった見た目だけではなく、教育にまで及んでいることも知りました。日本とカンボジアでは教育のレベルに差があるという事実にはそんなに驚きません。しかし、都市部と農村部にも大きな差があるという事実には同じ国なのだという驚きがありました。住んでいる場所ひとつで教育まで変わってしまうのだなど、そこでも格差を感じました。私たちが当たり前前に受けてきた教育は、当たり前なんかではなく、その環境に感謝すべきことで、幸せなことなのだと知りました。

そして、今回自分の力に直結したと思うのはホテルに戻ってのディスカッションです。一つのお題に対して自分とは違う考えを持つ仲間の意見を聞き、自分の考えを口にしていくなかに、また新たな考えが生まれ、私はみんなに刺激を与えてもらっていると感じました。ディスカッションがなければ、気付かなかったことも多くあります。刺激を与えてくれたみんなに本当に感謝しています。貴重な時間を過ごせました。カンボジアで見たこと、聞いたこと、考えたことはこれからの私に絶対に関わってくることです。何事もイメージだけで決めつけていては何の力にもならないと気付きました。これを機にできる限り自分の目で事実を確かめ、さまざまな価値観、視野を広く持てる人間になろうと思います。このツアーに参加して本当に良かったです。ありがとうございました。

【理想を追い求めて】

同志社大学 生命医科学部 2年生

「知識ではなく意識」、12日間のツアーを通して感じたことを言葉にするとすればこれであろう。様々なところを訪れ、話を聴いたが、誰もが強い意志を持っていると感じた。挙げればきりが無いが、カンボジアの医療を改善したいと活動する北原グループ、教育を良くしたいと願う CIESF、そしてカンボジアを観光で盛り上げようとするカンボジア王国観光省、カンボジアに貢献したいと日本語を学ぶ TAYAMA 日本語学校の学生、結果としてはカンボジアを最悪な状況に招いたポルポトも行き過ぎた資本主義をやめさせ、平等な社会を作りたいという意志があった。ベトナム、そしてカンボジアという一つの国の中で、生まれた国や目指すものは異なるが、それぞれが自分たちの目指すものにまっすぐに挑戦していた。この姿勢を見て「知識ではなく意識」という言葉が頭に浮かんだ。もちろん専門知識を身に着けるのは当然ではあるが、カンボジアの医療が、教育が、そして世界が気になる、何とかしたいという“意識”を持っている、意識があるからこそ知識も自然と身に付き、それぞれのプロフェッショナルになっていくのではと感じた。表面的ではない、実際の状況を把握し、一方的ではなく、しっかりと理解して受け入れてもらうという、この時間も手間のかかるプロセスを踏むということは、知識ばかりで頭でっかちになり、物事を自分の頭だけで選別してしまう人には到底できることではない。現在、順調に進んでいる活動も、最初は文化の差などがあり、かなりの苦勞をしていたようだが、時間をかけ、お互いを理解し、信頼を得たことの賜物である。それぞれの活動のベクトルの方向は異なり、同じ方向を目指すというよりは、円が拡大していくようにベトナム、カンボジアは発展していくのだろう。当たり前のようなことではあるが、“意識”の大切さ、物事への取り組む姿勢をここから改めて学んだ。

ではその“意識”を持つためにはどうすればいいのか。きっかけはさまざまであると思うが、今回のツアーは間違いなく自分に“意識”を持たせてくれた。ツアー中に自分のイメージが崩れていく場面が数多くあり、帰国するころには、今まで自分の中でもやもやとしていた将来の目標が定まってきた。特に自分に大きな影響を与えたのは、カンボジアの医療環境と公衆衛生の悪さだ。普段生活する日本では当たり前になっていることが当たり前ではなく、いかに日本が恵まれた環境であるかが分かったし、変えたいと強く感じた。自分と同じく、自分の中の当たり前が崩れていくことが“意識”を持つことのきっかけとなることは多いのではないか。例えば「憧れ」も良い意味での当たりの崩壊である。自分の国と比べて日本は進んでいる、日本は規律を守る勤勉な国だとベトナム、カンボジアの人たちは言い、日本のような国にしたいや日本が好きだと言う。しかし、実際に日本という国がどのような国かを詳しくは知らない。今、彼らの中の日本のイメージが原動力、つまり“意識”となっており、日本人として誇りに思うと同時に、これまで先人たちが築き上げてきた日本のイメージに助けられて今の日本があるのであり、自分たちも次につなげなければという責任感を感じた。またイメージのままの日本だけでなく、実際の日本というものも彼らに伝えていくことが今後に向けては大切なのではないか。ただの憧れではなく、ともに歩んでいくパートナーとしてありたいと自分は強く思う。

最初は参加を迷ったが、思い立ったが吉日。参加して、自分の知らないベトナム、カンボジアを知ることができたし、一緒にツアーを回った仲間たちに出会い、意見を共有することができ、とても充実した12日間であった。「一日生きることが、一歩進むことであれ」という湯川秀樹博士の言葉があるが、今後ツアーで得たこの気持ちや仲間、考え方を大切に、「意識」をしっかりと目標に向けて、一日一日を踏みしめて生きたい。

【本当の貧しさとは】

関西外国語大学外国語学部 4年生

テレビで放送される発展途上国を観て、私たちはついついベトナムやカンボジアなどの途上国＝（イコール）全てが日本よりも貧しい国、というイメージを持ってしまいます。しかしながらそれは全くのイメージだけの話で、実際にその地に足を運んでみなければ分からないことはたくさんあります。例えば、戦場やテロの起こっている地域に足を運び殺害されてしまったジャーナリストたちは、殺されたのは自己責任だという声を浴びることが少なくありません。ですが、今回私は12日間カンボジアとベトナムへ行ったことで、私はそのジャーナリストたちが何故直接そのような地へ自ら足を運んだのかが分かる気がします。行ってみなければ分からないことは本当にたくさんあり、想像だけで物事は判断してはならないということを学びました。

実際にカンボジアとベトナムへ足を運び、私が最も印象的だったのは人々の笑顔です。私のカンボジアとベトナムに対する第一印象は貧困でした。もちろん人々が明るく生活している姿は想像できませんでした。ですが実際に足を運び、人々が笑顔で暮らしているのを見て、カンボジアはいわゆる見かけから伺える、物質的・経済的な面では成長がより必要な国かもしれないが、その中身の部分である精神的には日本よりも豊かな国なのではないだろうか、ということに気付きました。

物質的な豊かさを求めるか精神的な豊かさを求めるか、きっとそれを選択するのは難しいと思います。物質的な豊かさとその平等さを究極に求めたポルポト政権が生まれたカンボジアの過去と、経済的には裕福ではないが、人々の笑顔が溢れる現在のカンボジア、経済的には発展しているがストレス社会と呼ばれている現在の日本から、2つの豊かさのバランスを取ることで人々は幸せになれるのかもしれないが、それは決して容易ではないことが読み取れます。だからこそ、現在物質的な豊かさが先行している日本と、精神的な豊かさが先行するカンボジアのお互いの良い点をお互いに学び合うことで、人々が理想とする幸せな平和な社会を追求できるのではないだろうかと考えました。

貧しい国というイメージが先行して、私たちはついつい途上国をどうにか「してあげないと」と上から目線で物事を考えがちです。貧しい国だから学ぶべきところはないと言えるのでしょうか。本当の貧しさとは、物やお金がないから、という単純な理由で片付けられるようなものなのでしょうか。そんなことはありません。私たちがベトナムやカンボジアなどの途上国から学ぶことはまだまだたくさんあると思います。

もし私がベトナムとカンボジアへ行っていなければ、このようなことに気付くことは出来なかったと思います。この12日間で、目で見ても肌で感じるということがいかに大切かを学びました。これは海外に限ったことではなく、普段の生活においても先入観に捕われることなく、たくさんの学びを深めていきたいです。

【カンボジアで感じたこと】

龍谷大学文学部 2年生

「僕たちは探していた、ありきたりの毎日を変えてくれる何かを」これは、2011年に公開した『僕たちは世界を変えることはできない』という映画の予告編で流れる向井理の台詞である。私はこの映画を観てカンボジアという国に興味を持ったと同時に、ありきたりの毎日を変えたいとも思った。皆さんが描く大学生活とはどのようなものだろうか、適度にバイトをして、サークルや飲み会、就活で有利かもしれないから必死に資格の勉強、スマートフォンを触ったり、居眠りしながら講義を受け、単位を取得する。そんな風に大学生活を送り、時が経ち四回生になったら周りの目を気にしながらダークスーツで身を包み就職活動、こんな大学生活を送りたくない、自分にしかできない経験をしたい、主体性を持って能動的に物事に取り組みたいと思い日々を過ごしていた。そんなある日、大学の掲示板でJAPFの広告を目にした、カンボジアでスタディー型インターンシップ、大学生を対象とした企画で自分と同じような意識の人達と関わることができるかもしれない、自分を成長させる経験ができるかもしれないと思い参加を決意した。

参加するにあたり事前学習としてカンボジアについて調べること、TAYAMA日本語学校で日本の魅力について発表するプレゼンテーションの作成が課せられた。実際にインターネットや書籍を利用してカンボジアについて調べてみると貧困や格差、そしてポルポトという人物によって行われた大量虐殺の歴史を知ることになった。様々なカンボジアの実状、歴史を知識として蓄え私達参加者19名と引率者2名、計21名はカンボジアへ入国し8日間のスタディー型インターンシップが始まった。

初日、首都であるプノンペン空港に到着した時、物凄い熱気を感じた。2月という日本では冬だが、カンボジアには冬なんてものはない。バスで市内を移動する最中、窓の外に目を向ければヘルメットを被らず、二人乗りや三人乗りしているバイクが当たり前のように道路を走っており、信号はほとんど無くひどく渋滞していた。町には中国語表記の店が目についた。

二日目に訪問したKURATApepparで聞かせていただいた倉田さんの価値観の話が非常に興味深いものだった。アリとキリギリスの話、冬に備えてひたすら働くアリと夏のバカンスを楽しむキリギリスどちらが幸せか。冬が来る国においてはアリの生きの方が計画性があり、冬を乗り越えることができるかもしれない。しかし、カンボジアのような国では冬は来ない、カンボジアの気候では年中バナナが採れるらしい、つまり、働かないキリギリスのような生き方でもある程度は成立するのである。上記のアリとキリギリスの話でアリの方が幸せであると考えてしまうのは冬という概念を持っているからであろう。アインシュタインが次のような名言を残している「常識とは18歳までに集めた偏見のコレクションだ」、今後の生活では価値観を広げるべく沢山の人と関わり、多くの考え方を受け入れたいと思った。

CCHの子供達は本当に元気で笑顔に溢れていた。外国人である私達に対して戸惑いも見せず一直線に向かって来ては手を取り遊んで欲しがっていた、日本の子供達が外国人に対して同じようなことができるか疑問である。二日目の夜、「孤児院は孤児問題を解決するかどうか」というテーマでディスカッションをした。CCHは親がいない子供やゴミ山で生活している子供、母子家庭の子供などを預かり生活支援をしている。このような支援団体により孤児達が現状の生活から抜け出せることは間違いないが、一時的な解決にしかならないことは否めない。

三日目、最初に訪問したカンボジア観光省では自身の英語力に幻滅した、観光省のパワー

ポイントを使った英語でのプレゼンテーション、単語単位では理解できても、文章全体の意味は理解できず、プレゼンテーションの内容のほとんどが通訳を介しての理解になってしまった。自身の質問に対して観光省の方に「excellent question」と言っていたことは誇らしい気持ちになった、通訳を介せず自身の英語で質問したかった。次の引用は本で読んだある一文である、『仮に10人で会議をとする、内訳は日本人7人、中国人1人、アメリカ人1人、フランス人1人、このような場合会議で使用される言語は英語である、人数が多いから日本語で会議をすることにはならない。』これからのグローバル化や東京オリンピック、英語を必要とする機会が一段と増えていくことが予想される。自身のためにも英語学習について考えようと思った。カンボジア観光省のプレゼンテーションは今後の政策についてだった。カンボジアの主要な産業は農業、観光業、縫製業、建設業であり、その中でも観光業は経済を牽引している。観光省は今後も外国人旅行者を増加させようと様々な政策を考えていた。TAYAMA日本語学校での発表は非常に良い経験だった。どのような発表がカンボジアの学生の為になるのか一生懸命考えて作成した日本の漢字についての発表は、学生達の反応も良く引率者にも褒めて頂きこの上ない達成感を得ることができた。カンボジアでは外国語を話せるというスペックは大きな意味を持ち、彼らにとって勉強とは多くの給与を貰うための手段でもある。日本の学生とは意識が違う、必死なのである。日本の大学という教育機関は本当に必要なのだろうか、教えることに消極的な教授、本気で学ぼうとしない学生。三日目の最後に訪問したHIV病棟では、HIV患者である男性の「普通の人間になりたい」という言葉が非常に印象的で考えさせられた。HIVが完治することはない、見た目は普通の人とさして変わらなかった、本当に心が痛かった。彼は元々運転手をしていたが、病気になり手術した際にHIVに感染したそうだ。彼自身も想像することができなかつただろう、当たり前のような生活が一変してしまったのである。このようなことは彼に限らず誰にだって起こりうる可能性がある。我々は心のどこかで当たり前のように明日が来ると思っている、いや、もしかしたら明日のことなんて考えずに過ごしているかもしれない。

四日目の訪問はトゥールスレン強制収容所とキリングフィールドだった。ポルポト政権時代にこれらの場所で多くの命が奪われた。ポルポトは原始共産主義を説き、反乱分子になりうる知識層を虐殺したわけである。そのような場所の空気は独特なものであった、上記のような、いわば負の遺産がカンボジアの観光業の一部として産業を支えていると思うと皮肉なものである。長距離のバス移動の道中、ほとんど明かりが無く電気の供給が進んでいないことがわかった。日本では考えられない生活を送っている人々がいるという現実を知った。

五日目のゴミ山は衝撃的だった、スカベンジャーと言われるゴミを拾って生活している人がいるということ。その夜のディスカッションのテーマは「ゴミ山を無くすべきか否か」このテーマは非常に難しい問題である。ゴミ山を無くことはゴミ山で暮らす人々の生活を奪うことになるが、ゴミ山がもたらす健康被害など、いつかは焼却施設を必要とする日が来るだろう。実際問題、カンボジア政府がゴミ山に対してどのような認識をし、政策を考えているのか非常に疑問である。アキラーさんの話には勇気をもらった。アキラーさんは幼少時代に両親を亡くし少年兵として戦争をするしかなかった。しかし、戦争が終わったら選択をする自由ができて勉強をしたそうだ。選択をする自由、なんと素晴らしい言葉であろうか、自分の自由すぎる現状をもったいないと思った。

六日目に訪れたアンコールワットやアンコールトム、壮大な遺跡にはただただ感動させられた。朝日や夕日を見ながら自分の生き方、人生について考えた。高校を卒業して盲目的に大学に進学し将来の夢も持たず過ごしている自分、壮大な景色の中では自分という存在はとてつもない小さかった。カンボジアに来て、様々なモノを目にして価値観や考え方が大きく

変わった。六日目の夜に、参加者全員がホテルの一室に集まり参加した動機、今回の経験を今後の生活にどうやって活かしていくかについて発表した。私は参加者一人一人の考えを聞き、今回のスタディー型インターシップにこのメンバーの一員として参加することができ心の底から良かったと思った。

七日目は農村を訪れた、そこは生活のインフラがほとんど整備されておらず自分の暮らす環境とは大きく異なっていた。夕方の自由行動では、日本人が出店していた屋台で焼きそばパンを食べた。屋台を出していたのは静岡大学の三回生の学生でNPO法人のインターシップでカンボジアで屋台を出しているらしい。彼は在学中に二年休学してアメリカで農業の勉強をし、将来は出身地である高知県で地域町興し協力隊として働くそうだ。海外でそのような魅力的な人と出会うことができ良かった。

このような貴重で濃密な時間を過ごしたことにより、私の中の何かが変わったことは言うまでもない。私の拙い文章では伝えきれないことが今回のツアーでは沢山あった。今回の経験をこれからの人生の糧にして様々なことに挑戦したいと思う、いや、しなければならない。私には選択する自由がある、今まで大した選択をしてこなかった、当たり前のように普通に敷かれたレールを走っていただけである。地元の小学校、中学校に通い、入れそうな高校を受験し入学し、行く意味も理解できないまま唯一受かった大学に進学し今を生きている。私は今回のツアー中、自分の今までの人生を見つめ直し、これからの生き方について考えてた。近畿大学の卒業式で堀江貴文が次のようなことを言っていた、「未来を恐れず、過去に執着せず、今を生きろ」と。私たちに重要なことは今を一生懸命に生きること、そんなことを思ったときにふと思い出した、カンボジアの子供たち、HIV患者の男性、農村の人たち、TAMIYA日本語学校の学生、地雷で足や手を失い楽器を弾く人たち、観光客に対して商売をする赤ちゃんを抱えた女の子、どの人たちも今を一生懸命生きていた。

最後に、今回このような経験をする機会を与えてくださったJAPFの皆さま、引率者の柳内夕佳里さん、森永大貴さんには本当に感謝しています。また、ツアーに参加した19名には多くの刺激を貰いました、本当にありがとうございました。

【ベトナム・カンボジア研修を終えて】

東京農工大学農学部地域生態システム学科 1 年生

私がこの春参加した JAPF 2016 年度春期インターンシップは、私にとって、「学び方」を学んだ研修であった。まず、実際にベトナム・カンボジアという国を訪れ、その日学習するトピックを踏まえた研修先にて実際の現場を見ながら、そこに携わる方々のお話を直接聞いた。実際に現場を訪れることで、今まで自分が抱えてきたイメージがどれほど他人からの見聞に依存しているかということに自覚した。研修先では、それまでのイメージが急激に一変することや、一般論とは真逆の印象を受けることなどもあり、自分自身の考察や思想を持つためには実際に現場に赴くということが必要不可欠だと感じた。次に、学んだことに対する自身の考えをまとめ、ほかの参加者と意見交換を行った。意見の交換を行うことで自分だけでは考えることのできなかつた新たな考え方を学ぶと同時に、学んできたことに対して時間をかけて考察・分析をしたり意見を練ったりすることによって、その場限りの記憶ではなく、自分の中に知識として定着させ、蓄積していくことが出来た。最後に、その日一日の学習のまとめとして研修メンバーの中でディスカッションを行った。今回ディスカッションを幾度となく重ねる中で、ディスカッションにおいて重要なのは的を得た的確な発言をすることではなく、参加者がまんべんなく各々の意見を発言することだと感じられた。参加者が多いというのはそれだけ多様な価値観があるということであり、どんな意見でも発言そのものが刺激となって、同意や反論、ひらめきなどの何らかの形となって他者に影響を与えていた。ディスカッションでは、意見を共有し、議題となる問題を他人事ではなく自身の問題として身近にとらえることを学んだ。

研修を終えた今、自分の中で成果として残せたと実感するものが二つある。一つはカンボジアの現状に対する考察であり、もう一つは自分の学習についての意識の変化である。

今回の研修で得たカンボジアの現状に対する考察は、大別して 2 点挙げられる。一つ目は、カンボジアに各国から寄せられる支援の侵略的一面である。まず、私は支援がカンボジアの意向を無視した、ドナー国による一方的なものになっている印象を研修中何度か受けた。例えば、教育分野に対する支援では、教育内容はカンボジアが定めた基準ではなく、ドナー国が自国で実施している教育内容に基づいてカンボジアの子供たちに教育をしていて、各ドナー国による微妙な支援内容の違いは完全に無視されてしまっていた。また支援の世界では、一つの支援先には一つのドナー国が割り当てられるのが原則であるようで、例えばカンボジアで問題になっているごみ収集事業に関しては、すでにフランスの企業に一任されてしまっていて他国には手出しができないとのことだった。これらはまるで支援先を「我先に」と言わんばかりに争奪戦によって得ているような感じがして、言い方は悪いが、かつてよりもっとローカルな単位での植民地化を彷彿とさせるときがあった。

また、支援の中身は、問題の核心に触れているものが少ないとも感じた。各団体が実施できる支援には限界があって、核心には踏み込めないような感じ、とでもいうのだろうか。HIV に対して予防知識の呼びかけは大量になされているのに、肝心の HIV 患者に対してはあまり多くの支援はなされていない。たくさんの学校を建てても、教育者がいない。支援に関するお話では、「魚を与えるのではなく、魚の捕り方を教える」というモットーをよく耳にした。もちろん間違いではないと思うのだが、この方針にこだわりすぎて、本当に魚そのものを必要としているところを見落としてしまっていないだろうか、と思った。病院の不衛生な環境に対して、医療従事者や家族の意識改革を試みる支援は多いが、一定期間病院を閉

鎖して衛生的な施設にリフォームしたなどの支援はない。いわゆるハイリスク・ハイリターンの支援というものが、この業界では徹底的に避けられているような気がした。さらに、とりあえず何もやらないよりはマシだ、と着手しやすい支援だけが急増した結果、最終的に何がしたいのかということが見えなくなってしまうようにも感じた。

二つ目は、カンボジア政府の抱える課題の数々に対するものである。カンボジア政府が直面している現状は、想像を絶するくらい困難を極めている。今回様々な研修先を訪問するにあたり、どんな分野においても必ずカンボジア政府の話題があがった。研修全体を振り返って見ると、カンボジア政府に寄せられている要請はあまりに膨大すぎて、優先順位のつけようがないほど積み重なっているようであった。また、他国から流入する支援もカンボジア政府の現状をさらに複雑なものにしている面もうかがえた。直接的にこれを感じたのは、アキラ地雷博物館を訪問したとき、膨大な量の地雷除去を順調にこなすアキラさんの活動を政府が快く思っておらず、しばしば衝突することがあるというお話をうかがったときである。カンボジア政府は各国からの支援金を得たいがため、「地雷をたくさん抱える国＝支援の必要がある」という構図を捨てきれずにいる。さらに、その支援金は国の事業ではなく、官僚たちに横領されてしまうこともしばしばであるという。私は以前、これとまったく同じ現象がアフリカ諸国でも起きていることをある本から学んでいた。一見憤りを覚える現象なのだが、その予備知識を含め、カンボジア政府だけにすべての責任をなすりつけることはできないと私は考える。なぜなら支援金はカンボジア政府の中で収入減としてあまりにも定着しすぎてしまっていて、それを与えたのはドナー国諸国だからだ。莫大な支援金はそれが何に使うためのものなのかが分からない段階でカンボジア政府に流れ込み、国内で歳入を得る仕組みを整えるより先に存在していた。いまだ不安定な自国の歳入より、毎年確実に流れ込む支援金を少しでも多く得たいと考えるのはむしろ当然なことのように思われる。行き場のない支援金を横領できてしまうことが当たり前になっている点も、支援の甘さをうかがえる。今、カンボジアは自立と支援のはざまでジレンマを抱えている。皮肉なことではあるが、自立への支援の手段としては支援を断ち切ることが必要なのかもしれない。課題は多いが、ゆくゆくは全ドナー国が支援金を給付する期限を設けたり、支援金に返済義務を付けたりなど、なんらかの手段を講じるようになるのではないかと思われた。

また、政府の現状をうかがうことで、これまで日本で意図やポイントを見落としていた政策の数々に気が付くことができた。例えば、建物の固定資産税などは、貧富の差が自動的に開けていくことを防止している。その他には、社会保障が人口ピラミッドと密接に関係していて、現在つぼ型となっている日本では社会保障を循環させるのが物理的に難しくなっている。しかし、発展途上国はまだピラミッド型をしている国がほとんどで、社会保障の仕組みを整えるには絶好の機会になるということなどだ。社会保障は生活をよりよくするための仕組みというイメージが強く、政策の中では何かと敬遠されがちな気もするが、しかし現在深刻な問題となっている人口爆発の問題などの抑止策としても機能するのではないかと考えられる。途上国における社会保障の着手においては、もっと早急に議論される必要があると感じた。以上が今回の研修を概して感じた、カンボジアの現状に対する考察である。

次に、自分の学習に対する意識の変化について、こちらも大別して二点挙げられる。

一つ目は、学習時のインプットとアウトプットの関係の重要性についてである。私は研修以前、大学などの講義において極端に受け身な姿勢で学習していることに悩みを抱えていた。具体的には、質問や感想を持ちたいのに、何も思い浮かばないことなどが深刻だった。そのため、何かこちらから発信するものを用意しなければと、講義の終わりが近づくと内容を振り返りながら粗探しをするようにして質問や感想を用意していた。もちろん、何も思い浮か

ばずに講義を終えることもよくあった。これらはすべて、自分のアウトプット力の欠如によるものだ と認識していた。しかし、今回のベトナム・カンボジア研修では、貴重な機会をどうしても棒にふる いたくないという思いから、たとえ納得のいくアウトプットが出来なくとも、せめてインプットだけは自分の限界まで見聞きしたことを吸収しようと目標をたて研修に臨んだ。しかし結果として、いつも以上に真剣に話を聞こうと意識的に努めたところ、話の最中に質問や感想が自然に湧き出てきたのである。このことから、平素の自分に欠如していたのは、アウトプットではなくインプットの方だったのではないかと気づくことが出来た。自分では聞いているつもりでも、内容が素通りしてしまっていたのだろう。きちんと内容を自分の中に落とし込むことができれば、その自然な反応の産物として意見や感想が生まれるのだと思った。「話を聞く」という行為の奥の深さに気づくことができたのは、自身の大きな収穫であったと思う。今後も意識的に話を聞くということを心掛け、今回の経験を生かしていきたいと強く望んでいる。

二つ目は、知識の重要性についてである。これを感じたのは研修のディスカッションの最中で、話を進行させたくとも、自分たちの知識不足のせいでなかなか話を進められないことが何度かあり、このとき、自分の中に吸収されている知識が物事を考察する上でどれほど重要な役割を果たすかということ を自覚した。私の今までの学生生活の中では、誰しもが必ず一度は「こんなものなんの役にたつんだろう？」と自分の学んでいる内容に疑惑を感じていたと思われる。私自身もよく思っていた。例えば歴史などの暗記科目などは、その知識自体をどうこう考えることはほとんどなく、過去の出来事は試験などの点取り道具でしかなかった。現代の学歴重視の競争社会といった風潮の中ではそうなってしまうのもやや必然的なものかもしれないが、しかし知識とは本来、それ自体をひけらかすためにあるのではなく、自分が思考する際にそれを用いることで、より一層内容を深め、事実や結論に近づける、いわばスパイスのような役割を担っているのだと今回の研修を通じて再認識することが出来た。これを踏まえ、今後は損得を考えて知識を得るのではなく、必要な時に自分の糧にするため、積極的な姿勢で知識を吸収できる人になりたいと感じた。

私は JAPF 2016 年度春期インターシッ プで、本当に「学ぶ」ことができた と実感している。研修のテーマであった、ベトナム・カンボジア等発展諸国の抱える問題という固有の枠にとどまらず、もっと広くて大きな、分野に縛られない大切なことをたくさん学べたと実感している。真剣に学んだ 11 日間の研修は想像以上に濃密な時間で、学びのもたらす可能性が無限大に存在することを改めて私に気づかせてくれた。今回の経験を活かし、常に真剣な学びをすることが、今後の学生生活における自分の目標である。そしてゆくゆくは蓄積したものをあり余すことなくアウトプットしていけるようになりたいと思う。そのアウトプットが少しでもベトナム・カンボジアに利として還元されれば、それは願ってもない幸いである。そうできるよう、自分の指針を客観的に評価しながら、しかし潔く自分の理想とする将来を築き上げていきたいと思う。

「1週間を通して考えたこと」

京都大学法学部 1年生

“普通”、“貧しい”、“幸せ”って何？

カンボジアでの1週間、ずっとこの問いが頭の中をぐるぐるしていた。高校生のときに途上国のことを調べていたので、貧しい=不幸でないことは分かっていたが、“貧しい(poor)”ということが何を意味するのかを考えたことはこれまで一度もなかった。そこで、私は、金銭的貧しさと精神的貧しさの2点から、カンボジアの人々の生活が“貧しい”と言えるのか(正しくは、“貧しく”見えたか、かもしれない)についてこの論文を書きたいと思う。

まず、金銭面での貧しさについて。カンボジアの平均月収は、150ドルから160ドル。日本の平均月収が20代で22万円(約1950ドル)ということを見ると、その差は10倍であり、とても日本では暮らしていけないだろう。しかし、彼らが住んでいるのはカンボジアである。屋台には日本のものより断然美味しいフレッシュジュースが1ドルで売られていたり、焼きそばやTシャツが2、3ドルで売られていたりする。そのような環境で、彼らの月収は“貧しい”と言えるだろうか。また、最終日に行った農村では、家が吹き抜けて電気も水道もない生活をしていた。日本では生きていけないほどの貧困と言われるかもしれないが、彼らの家の隣には、ジャックフルーツの木や年中実がなるバナナの木が育っている。牛車のための牛や鶏もいて、川には魚や貝がいる。つまり、彼らはほとんど自給自足生活を送っているのだ。金銭的な貧しさも、価値観と同じで環境によって変わるということを実感した1週間だった。

次に、精神面での貧しさについて。正直、この点に関しては日本の方が“貧しい”ように感じた。街では店番をしながらイスで昼寝をする人や、休日に家族とピクニックに行く人がいる。農村では、暑いので一度家に帰り、昼寝をしてから仕事や学校に戻るといった生活が送られている。本当に時間がゆっくりと流れていて、日本の分刻みの生活とは全く異なっていた。毎日電車で疲れた顔をしたサラリーマンを見ている私には、カンボジアの人々の方がよっぽどいきいきとしていて“幸せ”に見えたとし、うらやましくも思った。

ここまで書くと、カンボジアはとても幸せで問題のない国に思われるかもしれないが、孤児院で寂しそうな顔をする子どもたちや、ゴミ山で働く子どもたちがいるということも忘れてはいけない。研修先のカンボジアの方々はいよいよ笑顔で迎えてくださったが、それが国民性によるものでもあったし、ゴミ山で子どもを連れてきたお母さんの、半ば諦めたような笑顔は印象的だった。

このように、カンボジアには解決されるべき問題が山ほどあるのも事実である。しかし、その問題を解決するのはカンボジアの人々であるはずだ。外部からやってきた私たちが勝手に判断すべきでないし、その必要もない。“手伝って”と言われたときに、手を差し伸べられる状態でいられたら十分ではないだろうか。

“カンボジアはカンボジアの人々のもの”

こんな当たり前のことを決して忘れてはいけないと強く思った。

最後に、このツアーでたくさんの素敵な学生と出会えて良かったです。出身も年齢もバラバラだったけど、たった1週間で(おそらく1週間だからこそ)ここまで楽しい時間を過ごすことができ、忘れられない大切な思い出になりました。

本当にありがとうございました。オークン！

【ベトナム・カンボジアが私に教えてくれたこと】

関西外国語大学外国語学部英米語学科 1年生

私がこのツアーに参加しようと思ったのは、東南アジアに興味があったからでした。アジア文化論の授業でベトナム戦争やカンボジアの地雷被害について学んでから東南アジアに興味を持ち、現地に行って自分の目で見ることでより多くのことを学びたいと思いました。出発前の印象は「あまり発展していなくて貧しい国」でした。特に「カンボジア」と聞くと、「学校を建てよう」という言葉が次に浮かび学べない子供たちが多くいる印象でした。しかし実際に行ってみるとその印象は覆されました。高層ビルが立ち並び道路にはベンツやBMWなどの高級外車がたくさん走っていてすごく驚きました。また、服装においても、日本人と同じでおしゃれを楽しむ人がいることも見て取れました。それが私のベトナムやカンボジアに対する第一印象でしたが、12日間の研修を経て新たな印象も生まれました。

まず一つ目は、格差が大きいということです。大通りから脇道に入るとそこはさっきとは全然違う雰囲気です。ゴミが落ちていたり建物の老朽化が目立ったりしていました。離れたところではなくすぐ近くで大きな差が生じていたため、より格差の大きさが目立ちました。

次に印象深いのは現地の人との交流です。特にカンボジアのCCH孤児院、TAYAMA日本語学校での交流は私に色んなことを考えさせてくれるものでした。孤児院では、初めて孤児と接するので心配していましたが、子供たちの方から寄ってきてくれて最初はすごく嬉しかったです。しかし後から、あれだけ子供たちが人懐っこかったのは、親や家族がいなくて寂しいからなのかなと思いました。そう思うとあの子供達のために少しの時間しか遊んであげることしかできない自分が虚しくなりました。TAYAMA日本語学校では生徒の皆さんの元気に驚きました。返事や挨拶を大きな声でされていて、日本人よりすごかったと思います。プレゼンテーションをしている時は皆さんのやる気がすごく伝わってきて、学校へ行って勉強できることが当たり前ではないカンボジアでは、勉強できることはとても嬉しいことなんだと伝わってきました。日本では教育を受けられるのが当たり前で、学校へ行きたくないという人も多くいます。そういう人にこのTAYAMA日本語学校での体験をぜひ伝えたいです。

最後に、この研修でほぼ毎日行ったディスカッションや意見交換があったからたくさんことを学べたのだと思います。ディスカッションや意見交換では、自分では気付かなかった視点を見つけることができました。長所だと思っていた事でも少し見方を変えると問題点や課題が見えてくるのはすごく面白かったです。私が一番深く話し合えたと思うのは、最終日の最後のディスカッションです。自分たちで話し合うテーマ、トピックを考えるのは少し大変でしたが、すごくやりがいのあるものでした。私の班は日本のカンボジアでの支援のあり方について話し合いました。研修中に何度か聞いた、「釣った魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教えてあげる」という言葉を頭に浮かべながら話し合いました。その中で出たのは、幸せとはなんだろうという意見です。日本人が考える幸せとカンボジア人が考える幸せは違うはずですが、だから、日本はこうなのにカンボジアは違うからかわいそう、助けてあげようという姿勢で支援するのは良くないのではないかと思います。日本の基準に合わせる必要はない、カンボジアはカンボジアらしくあって欲しいと思います。そして支援慣れしてしまわないようにも気をつけて欲しいです。

この研修で思ったのは、本やテレビで知識を得るのと実際に見て感じて体験することは全然違うということです。授業で学んだことでも実際に見て感じて学ぶと伝わり方が全然違うなどと思いました。奇形児のことは写真で見たことがあったけど、その時より実際に会った時の衝撃は何倍も大きくてその深刻さが伝わりました。私がこれから出来ることは、自分が現地で見て感じたことを伝えることだと思います。講演会を開いたり大々的に話したりすることはできませんが、まずは友達や家族に話すことから始めようと思います。自分が将来どんな仕事をするのかはまだはっきりとは決まっていますが、どんな職業に就いてもこの研修で学んだことを生かしていきたいです。本当に貴重な12日間になりました。

【毎晩のディスカッションで学んだこと、これからについて】

神戸大学工学部 3年生

このスタディツアーでは、一日の終わりにカンボジアの社会問題についてディスカッションをするのだが、議論をすることで様々なことを学んだ。

まず、他人がどう感じたかを聞くことができたことだ。価値観は人それぞれに異なると、KURATA ペッパーで教えられたように、1日の終わりに他人の意見を聞くことで今日行った研修先に対する自分にはない考えを持っていたと分かり、自分の意見も大事だが、それに固執することも良くないなと感じた。

次に、ディスカッションでは基本的にカンボジアの社会問題の解決策について話し合うので、問題に対峙した時にそれに対処していくことの難しさも感じた。研修ではお話を聞くことがメインで、現状を知るといことばかり行っていて、そのままでは知っただけで終わってしまうが、その晩に実際に自分が問題に対処すると仮定して議論をすると、これからもカンボジアの社会問題についても考え続けることができるな、と後で思った。ディスカッションテーマは「～するのがよいのか、悪いのか」というものが多かったが、これは実際に社会問題に取り組む人の立場なのか、それとも今それで苦しんでいる人の立場なのかで変わってきて、場合に分けて答えを二つ出してしまい、実際には決断しなくてはいけないから難しいなと思った。問題を解決するには、今までの決められた、常識的な見方をするのではなくて、階段を急に2段飛ばすような、突発的な発想力も必要なんだとも、議論で感じさせられた。

また、議論を重ねたこれらの問題を引き起こした原因は長きに続いた内戦のせいであり、その根本は地雷博物館でたまたまお話を聞いたボランティアの方が言った、アメリカが自分の都合によるものなんだなと思い、国際社会のリーダーとは何なのだろう、と強く考えさせられたし、戦後の国際情勢についてもっと学びたいと思うようになった。

虐殺や地雷など、様々な暗い歴史背景があるのに、マーケットの人や孤児院の子供たち、アキラさんの笑顔が日本人にはないもので、カンボジアの人は素晴らしいなと思ったし、自分たちは笑顔が少ないな、と帰国後感じた。自分はクメール語が話せないけれど、相手から笑顔を向けられて自分も笑顔で返したら、もうコミュニケーションになっていて、世界との繋がりを感じた。自分は将来エンジニアになるつもりで、またカンボジアを訪れることもあると思うので、もしカンボジアで仕事をするようになったら、今回のツアーで学んだカンボジア人の人柄を理解して一緒に仕事をしていきたい、と思った。

【カンボジアで学んだこと】

長崎国際大学人間社会学部 2年生

小学生の頃、カンボジアに学校を建設するプロジェクトを芸能人の方がしていた。その頃の私は、学校がない環境があることに驚き、貧しい国のイメージを勝手に抱き「この国に行くことなんてないだろうな」と思っていた。中学生のころに発展途上国に興味を持ち出し、なぜ同じ人間なのに生まれた環境によって、生活に差が生じているのか考えるようになった。その思いは変わることなく、そこで出会ったのがこのスタディーツアーだった。

カンボジアを訪れて今まで持っていたイメージが変わった。今までは、十分に食べるものがなく土地は開発されていない、正直貧しい国と思っていた。しかし、実際には町は開発されてレストランや高い建物があり、道路には高級車が多く走っていた。本当に驚いた。でも、そこには日本にはない温かみがあった。家族や友人と公園でピクニックをしている人々、運動をしている人々。カンボジアの人々は時間に追われずゆっくりと過ごしている印象を受けた。カンボジアの人々は常に笑顔で、失敗をした時も笑顔で過ごすのだよ、とガイドさんが教えてくれた。日本であれば、なんで笑っていられるの？反省してないの？と怒られるのが当たり前だ。カンボジアは笑顔溢れる素敵な国というイメージが強くなった。もちろん、素敵な国のイメージを覆すものも見た。ゴミ山では、悪環境のなかで生きるために必死でお金になりそうなゴミを拾い集めている姿をいくつも見た。学校に行きたくてもゴミを拾う仕事を優先してしまい休みがちになっている小学生の男の子。ゴミ山にいる人々はそれぞれ考えも違い、ゴミ山での生活が悪くないと思っている人や夢を持って頑張る人もいるが、その男の子の“幸せではない”の一言が心に残っている。ゴミ山で働かずに学校でたくさん勉強ができたらいいが、自分にはどうすることもできない問題だと痛感した。カンボジアには経済面で教育を受ける余裕がない、教育の重要性を知らない人々が多いと感じた。最近では海外の支援などで学校も増えている。日本の支援も多いらしく、誇らしい気持ちになった。日本語学校の学生は、日本語の勉強を熱心に頑張っていた。その姿は今に自分に足りないものだと感じた。将来のために目標や夢を実現するために努力する人に負けないように自分も努力したい。

カンボジアにはまだまだ自分の知らない問題もあり、何をすべきなのかわからないことがほとんどだと思う。参加者とのディスカッションは、自分にはない考えも聞くことができ、人それぞれ価値観や考えが違い勉強になった。他の人の意見を聞くことで考えも深まり楽しかった。しかし、価値観や考えの違いがあるからこそ、世界全体が1つになることも難しいのだと痛感した。このスタディーツアーはこれまでの軽い考えを変え、自分の小さな視野を広げることができた。カンボジアについてもっと深く知ろうと思うし、学んだことをそのままにせず理解を深めていきたい。これからの生活は、当たり前の幸せを大切に感謝しながら過ごしていきたい。このツアーに参加したことで、将来のことについて考えるきっかけを持つことができた。きっかけをありがとうございました。

【JAPF インターンシップで学んだこと】

立命館大学法学部 4年生

JAPF インターンシップを通じて、ベトナム、カンボジアの歴史そして現状を理解し、さらに日本との関わりを知ることができた。

ベトナムでは戦争証跡博物館やクチトンネルなどを訪れてベトナム戦争について学んだ。ベトナム戦争が起きた経緯や被害を知ること、改めて戦争の恐ろしさ、平和の大切さを感じた。また、ベトナム戦争は決して過去のものではなく、現在にも影響しているものだと知った。平和村では、ベトナム戦争で使用された枯葉剤で影響を受けてしまった子供たちと触れあった。戦争は一般の人々、そして世代を超えて被害をもたらす非常に恐ろしいものだと感じた。二度とこのような悲惨な戦争を起こさないために、世界中の国々が協力して、平和を守っていかなければならない。

カンボジアでは、平和、観光、医療や歴史など幅広い分野を学んだ。

カンボジアにはアンコールワット遺跡群やトンレサップ湖など世界に誇る観光地が多くあった。しかし、カンボジアもベトナムと同様に過去に戦争があり、その影響が現在にも及んでいた。カンボジアでは内戦により多くの人々が犠牲になり、それに伴い多くの文化が失われ、経済もまた衰退した。また、現在でもゴミ山の環境問題、教師不足の教育問題など、多くの社会問題があることも感じた。しかし、カンボジアの人たちは国の発展のために前向きに様々なことに取り組んでおり、カンボジアが急成長していることも強く感じた。むしろ、日本人よりも勤勉な人が多く、日本もカンボジアに負けずに、さらに努力する必要があると感じた。

そして、ベトナム、カンボジアのそれぞれが日本と深い関わりがあることを学んだ。

まず、両国ともに日本の企業や製品が多く進出していると感じた。町には多くの日本車が走り、広告には様々な産業の日本企業が掲載されていた。日本製がベトナムやカンボジアの経済発展を支えているのだと感じた。

また、民間同士の関係のみならず、国家間関係も非常に深いものだと知った。特に、カンボジアの「日本橋」はカンボジアの交通に大きな影響を与えた。多くの人々が「日本橋」を通行している現状を目の当たりにした。その功績のおかげでカンボジアの紙幣には日本の国旗が記されており、日本人として誇りに思った。

これからも日本はベトナムやカンボジアと友好を深めていき、互いに助け合っていくべきだ。

【カンボジアで学んだこと】

山梨県立大学国際政策学部国際コミュニケーション学科 1年生

私は、ニュースで各国の悲惨な現状を目にするたびに、日本は幸せな国で、様々な面で恵まれているのだと思っていました。そして、そのことは学校や両親からも、何度も教えられてきました。

また、カンボジアに対しては「貧しい国」「可哀想な国」といったように、ネガティブな印象が多くありました。

しかし、今回カンボジアへ行って見て、そういった考えが一掃されました。確かに日本はカンボジアに比べてはるかに衛生面が安心だし、治安も良いし、なにより経済的な豊かさがあると思います。でも、カンボジアにあって日本にはないものもたくさんありました。ガイドさんがおっしゃっていたことの中で、とても印象的だったことがあります。それは「日本人はあまり笑わない。でもカンボジア人は、楽しい時はもちろん、悲しい時、辛い時でさえ笑う。」というお言葉です。このことは、実際私が現地で様々なところへ行って実感したことでした。孤児院の子供達は、外国人で見知らぬ私たちを満面の笑みで迎えてくれるし、ゴミ山で働く方たちでさえ、インタビューに笑顔で応じてくれる。カンボジアには、経済的に恵まれず、日本人には想像もつかないほど苦しい生活をして暮らしている人たちが多くいますが、日本よりも明るく前向きであるという印象を受けました。

一方で、トゥールスレン収容所や、キリングフィールドなどでポルポト政権下のカンボジアの様子を知り、本当に悲惨な事が、ほんの数十年前まで行われていたことを学びました。この時代のせいで、今のカンボジアの教育や経済が世界から遅れをとっているということは紛れも無い事実です。

私は、こういった事実を、高校までの間に知ることなく生きてきました。授業で習った記憶がなく、教科書や資料集を調べても、「ポルポト」に関する話題は載っていませんでした。今回のスタディーツアーによって初めて、どのようなことが行われていたのか、具体的に知ることができました。私は、こんなに重大なことを今までに知らずに生きてきたことがとてもショックでした。そして、これ以上同じようなことが繰り返されないようにするため、日本の教育において正確な事実を後世に伝えていく必要があるように思いました。

今回のスタディーツアーを通して、自分がいかにカンボジアに対して無知であったか認識することができたのと同時に「自分も何かカンボジアのために役に立ちたい」という気持ちが強くなりました。それは、私が現地の人々の笑顔や人柄に魅了されたのと同時に、歴史的背景などを学ぶことができたことにより生まれた感情であると思います。今後は、日本とカンボジアが「相互的国際協力」といった考え方で、お互いを見習うべきところを吸収しつつ、支え合う態勢が必要だと思いました。また、自らもその担い手として、将来的に協力していきたいと考えています。

今回のスタディーツアーは、研修自体以外にも、引率者のお二人をはじめ、参加者の皆さんからの影響力も大きく、私にとって大変有意義なものとなりました。このような機会をいただけて本当によかったです。ありがとうございました。

【この研修から学んだこと】

新潟県立大学国際地域学部 1年生

私がこの研修への参加を決めた理由は、ただ「海外に行ってみよう」という簡単なものでした。普段テレビなどでしか見られない場所に行き、実際にその様子を自分の肌で感じることで何か得られるものがあるのではないか、と思ったからです。実際に研修に参加して得たものはたくさんありましたが、参加前には想像もつかないほど多くの発見がありました。その中で特に大きな発見を二つ挙げたいと思います。

一つ目は、ボランティアに関することです。“ボランティア”と聞くと、多くの人は良いイメージを抱くでしょう。ベトナムやカンボジアに対する支援でボランティア活動を行う団体はたくさんあり、もちろん日本からも多くの団体が現地で活動しています。しかし、本当にその国々に必要な支援を理解した上で活動できているのでしょうか。この疑問は、私のボランティアに対するイメージをガラッと変えました。具体的には教育面や医療面の支援についてです。「学校に行けない子供たちのために学校を建てた」「現地の病院に医療機器を寄付した」といった活動を行うボランティア団体はたくさんありますが、「勉強を教えることのできる先生がいない」「寄付した医療機器の使い方が分からない」という現状があることをボランティア団体は理解すべきだと強く感じました。ベトナムやカンボジアでは、いまソフト面の支援が必要なのです。“ボランティア”といっても、現地のニーズを理解した上で活動して初めて支援できたと言えるのではないかと思います。

二つ目は、自分の考えを発信することの大切さです。私はディスカッションやバスでの意見共有で、ある問題を考える際に自分と違う視点から見た意見や、深く考えられていてまとまりのある意見に衝撃を受け、徐々に自分の考え方や意見に自信を持ってなくなっていきました。もともと私は積極的に発言する方ではないので、この研修を通して克服できればと思っていたのですが、そんなこととは裏腹にますます消極的になっていきました。しかし、引率の二人に「その純粋な意見にハッとさせられるメンバーもいるはずだから消極的になる必要はない。他のメンバーもそれぞれの目標に向かって頑張っている。ぜひこのツアーを成長の場としてフルに利用してほしい。私たちはちゃんと頑張りをしているよ。」と声をかけられてから、積極的に質問や自分の意見を発信するようにしてみました。初めは緊張もありましたが、自分の意見を理解しようとしてくれるメンバーのおかげで、少し自信を持つことができました。また同時に、たとえ自信がなくても自分の考えや意見を発信することの大切さに気づくことができました。

私はこの研修でとてもたくさんのお話を学び、吸収できたと本当に実感しています。参加して本当によかったです。この貴重な機会を無駄にせず、今後にも活かしていきます。ありがとうございました。

【JAPF インターンシップを通して】

甲南大学 3年生

この研修で一番印象に残っているのは TAYAMA 日本語学校の生徒と触れ合ったことでした。私たちが来たと同時に大きな拍手。最後には歌まで覚えて私たちに歌ってくれて、私たちが言うこと書くもの全てを吸収しようとする生徒に本当に感動しました。

また、カンボジアとベトナムの人は私達日本人には持っていないものを沢山持っていると思いました。若い人が多くエネルギーで活気に溢れていてある意味で少子高齢化に悩まされストレス大国だと言われている日本よりもすごく豊かな国であると感じました。発展途上国と言われている通りまだまだこれからものすごい成長のしていく国だと思います。また外に出てみんなでくつろいでいる様子などを見ると人と人の距離が近いのも印象的でした。

そして、私はこの経験を通して叶えたいと思う夢をたくさん見つけることが出来ました。それを達成するには何をすればいいのかという課題も見つかりました。たったの12日でしたがカンボジアとベトナムは私に本当に沢山のことを教えてくれました。

もう1つ得たものがあります。それは本気で本音で語り合えることのできる支え合える仲間に出会えたことです。ディスカッションで悔しい思いをした私に夜中まで何が悪かったのかどうすればいいのかと一緒に考えて話し合ってくれた先輩。わたしの頭では考えもつかないような発想力や視点で自分の視野の幅を広げてくれる、歳下だけど尊敬できる後輩。そんな仲間と出会い、そんなみんなに毎日毎日行動や言動に刺激を受けて…。そんなみんなと過ごせたから自分も負けてられない！と頑張ることが出来ました。笑い合い、考え語り合い、泣いて支え合い、12日とは思えない程の仲を深める事の出来たことは本当にかげがえのない宝です。

慎重すぎてなかなか行動にすることが出来ない私にとってこの研修に参加するという決断をしたこともまた大きな一歩でした。就職活動が本格的に動き出す前で行くか行かないか本当に悩み最終的に行くという決断をした自分に感謝すると同時にこの研修の企画をして学ぶチャンスを与えてくれた JAPF に本当に感謝します。本当に、本当にありがとうございました。これからも1人でも多くの方が沢山の可能性を見出すことの出来るこの研修に参加してより良い人生を送ることができるようになります。

【カンボジア・ベトナムスタディーツアー】

同志社大学文学部 1年生

私はこのツアーで、自分がカンボジアとベトナムのことをよく知らなかったことに気付かされました。私はカンボジアやベトナムは貧乏な国で、日本の援助がかなり大きな助けになっているという印象を持っていました。もちろん、まだ都市部と農村部の格差は広がっていて様々な面で先進国の援助を頼ってはいますが、大半の子供が小学校に入学すること、十分な数の校舎があること、飢餓による死亡率はゼロであることなど少し前より生活が豊かになっていて発展のスピードの速さに驚きました。発展が進むことで、教育の質の向上や人材の育成などの支援も重要視されてきていますが、先進国の企業や慈善団体は自分たちのイメージアップや利益につながる物資などの目に見える支援を優先しがちであると知り、同じ日本人として申し訳ない、情けない気持ちになりました。そもそも、農業で生活が成り立つベトナムやカンボジアの人々が本当に経済発展を望んでいるのかも疑問でした。今までいろんな国が発展をするにつれて深刻化してきた環境汚染が、どの国でも取り返しのつかない問題となっています。また、裕福でも人の欲望は無限に増え続け、その暮らしに十分に満足して幸せに感じることは少ないと思います。カンボジアやベトナム人の中には、裕福でないからこそ幸せに暮らすことができると考える人もいるのではないのでしょうか。私は、研修前は途上国で学校を建てた人の話や日本企業が進出するのを見て、単純に立派だなあと誇らしく思っていました。しかし実際に現地を訪れて現地の人々の生活やその生活に対する思いなどいろんなことを知ると、日本人が良かれと思ってやっている支援などが、途上国の人を幸せにするとは限らないということがわかりました。今までの自分が、「これは本当にその人の役に立っているのか」というような疑いを持たずに、ただ聞いたことだけを呑み込んでいたことに気付かされました。また、日本の政治などについて考えるときにも同じように疑いを持つことが重要であると感じました。ベトナムでは、枯葉剤の影響による奇形児やその家族、カンボジアでは地雷、虐殺、教育の遅れ、孤児などポルポト政権時代の過ちが現在でも負の影響を及ぼし続けているのを目の当たりにしました。今回の研修で戦争の影響で苦しんでいる人たちに初めて生で出会って、嫌というほど戦争の恐ろしさを感じました。日本人はよく平和ボケしていると言われますが改めてその意味を実感しました。ポルポトのような指導者は国民が気付かないうちに現れるものだと思うので、他国と比べて国民の政治への関心が低い日本は危険だと思います。そういう意味でも国内で常識のように思われていることを鵜呑みにせず複数のメディアを比較したり、違う角度から批判的に物事を見つめたりすることが必要だと思いました。このツアーで得た貴重な経験をこれからも生かせるように、ツアー中に見つけたたくさんの課題を解決して成長していきたいです。

【ベトナム・カンボジアスタディツアー】

北九州市立大学外国語学部 2年生

私がこのツアーに参加しようと思ったのは、地雷博物館、HIV 病棟など、観光では絶対に訪れないような場所、そして参加者同士のディスカッションなど、個人ではなかなかできない内容に惹かれたからです。このような環境に自分を置いてみたいと思い参加を決めました。

実際には、知れば知るほど、学べば学ぶほど驚くことばかりで、衝撃を受け続けた日々でした。現地で見えるものは、私の想像を超えていました。事前に知識をあまり持っていなかったことでもあります。生まれた国によってこうも違うのか、同じ時を生きていても、その生活や育ってきた環境、価値観も概念も違えば感じることも違う。カンボジアの人にとってカンボジアが当たり前で、日本人にとっては日本が当たり前だけれど、二つの国の差が大きすぎて、戸惑いました。特に、カンボジアの首都プノンペンを訪れた時、舗装されていない道路やごみだらけの街を見て、これが首都なのか、と愕然として、言葉にならないような複雑な気持ちになりました。

私たちは手軽に海外旅行に行くことができ、安いくらいの気持ちでベトナム、カンボジアをはじめとするアジアを訪れるけれど、その国の抱える問題を知ると、そのような軽い気持ちで訪れていい場所ではないと感じました。日本語学校を訪問したとき、将来の夢は何か、と聞かれてとても焦りました。その時私は、当たり前のように勉強できる環境があって、お金の心配もせずに生活できているのに、何と自分に甘い生活を送っていたのだろう、この学生ほど熱意をもって勉強しているだろうかと気付かされました。私の夢は～です、と堂々と答えられなかったのが恥ずかしく、情けない気持ちになりました。彼らの熱意を見習わないといけないと思いました。

また 12 日間でベトナム、カンボジアでの生活に慣れて、日本に帰った時は、こんなに便利な生活をしていたのか、とこれまで自分の当たり前だった生活が、急に全く次元の違うもののように違和感を覚えました。改めて私は、何と恵まれた環境にいるのだろう、恵まれていることさえ感じなくなっていた日々、そしてこの気づきも、日を追うごとに薄れるのではないかと思うと、日本での当たり前、という慣れが怖くなりました。

ツアーを終えて、きちんと現実を知らなければいけない、という焦りに近いものを感じました。これまで、ベトナム、カンボジアと聞いて、アジアの発展途上国、ということくらいしか結びつかなかったのが、今回学んだ教育、歴史、医療などその国のさまざまな分野にも自然と意識が向くようになりました。また、なぜ未だに発展途上なのかについても意識が向くようになりました。そして、知らなければ感じるができない、考えることもできないと実感しました。ツアーは終わりましたが、これからも常に興味を持っておくこと、知識をもつことを心がけていきたいです。日本にいればインターネットなどで簡単に情報を得ることができるけれど、その情報で十分か、本当に理解しているか、その情報だけで満足せず、これからも発展途上国に興味を持って考え続けるきっかけをくれた、貴重な経験になりました。

【カンボジアで見つけたこと】

北九州市立大学文学部 1年生

せっかくカンボジアに行くなら、観光以外のところも見てみたい。そんな安易な考えで参加したこのスタディーツアーでしたが、事前学習でカンボジアの歴史的背景を調べていくうちに、少し怖気づいてしまう自分がいました。少しの恐怖心を持ったまま降り立ったカンボジアで、まず初めに衝撃を受けたのが道路の様子でした。4人乗りの原付バイクに、意味をなさない車線など、日本ではあり得ない光景を目の当たりにしました。初めのディスカッションで、「規制力のなさ=政府が弱い」という結論を私は出しました。しかし、日々の研修で様々な人のお話を聞き、自分の目で見て、触れ合っていく中で、何も知らない自分に気づかされたとともに新たな視点が自分の中に生まれていくのを感じました。いつの間にか、少しの恐怖心も知的好奇心に変わっていきました。カンボジアの残酷な歴史に触れるのは怖かったです。向き合ったおかげで、自分の生まれた国についての興味も湧いてきました。日本が戦後どうやって復興したのか、水道やごみのシステムはどのようにして人々に根付いていったのか、震災の復興はどのようにして進んでいっているのか、カンボジアと何が違うのか、知りたいことがたくさん生まれました。カンボジアでは、技術や知識が受け継がれていないことが今、何をするにしても大きな問題になっていることを痛感しました。規制力がないわけじゃなくて、受け継がれてないから難しいということに気づきました。しかし、そのことを考えて、カンボジアの「教育」や「経済的自立」を育てている日本人がいること、日本の寄付金のおかげで道路ができていること、とても誇りに思いました。今回のツアーでガイドさんが言っていた「カンボジア人はのんびりしているとされるが、それは違う。みんな戦争で疲れているだけ。今は生きていれば幸せだと思っている。」という言葉がとても印象に残っています。近年、カンボジアへのボランティアなどをよくテレビで見るとなりました。そして「カンボジア=発展していないから大変」など、どちらかと言うとマイナスなイメージを持っている人が多いと思います。私もその一人でした。しかし、実際に行ってみて、カンボジアは魅力溢れる豊かな国だということに気付きました。確かに街並みや仕組みは日本と比べるとまだまだではあります。貧困の格差も大きく、問題も山積みです。けれども、みんな笑っていました。ゴミ山で出会った18歳の中学1年生の男の子は、将来の夢は医者か先生だと答えました。電気も水道も通ってない村の子供たちは折り紙で作った紙飛行機で楽しそうに遊んでいました。同年代や、子どもたちの笑顔が本当に素敵で、パワーで満ち溢れていました。これはカンボジアの一部を切り取ったものでしかありません。ゴミ山で「幸せじゃない」と答えた男の子もいます。生活は貧しい家族がいるのも事実です。しかしカンボジアで出会った人々のパワーを見て、将来きっとカンボジアは素敵な国になると確信しました。私は今回の体験を多くの人に伝えたいです。それが今、私にできることだと思います。将来、どのような道へ進むかまだわかりませんが、この体験はどこへ行っても役に立つと思います。参加して本当によかったです。ありがとうございました。

「カンボジアスタディーツアー」

北九州市立大学外国語学部 2年生

私はカンボジアに行くまでは「日本人に生まれて本当によかった。」と思っていた。しかし、カンボジアに行き日本に帰ってくると日本人であることに誇りはあるが以前よりは日本人であることの嬉しさが薄れた。その理由をカンボジアで感じたこと、自分の将来についてこれから記していく。

渡航する前の私の勝手な想像では、カンボジアは今発展しているがビルが立ち並ぶような国には発展していないと想像していた。案の定現地に着くと、発展している区域はあるがビルがほぼ建っていなかった。それに加え、モールでは仕事にもかかわらず同僚と大笑いをしながら話し、挙句の果てに店員が寝ている店も少なくなかった。私はその時カンボジアは発展段階とはいってもたいしたことはないと感じ、心のどこかでカンボジアを見下していた。しかし、翌日訪問した KURATA PEPPER の倉田さんの話を聞いてその考えが一変した。カンボジア人には独自の生き方があり、実はカンボジア人は物凄く豊かな国であるとおっしゃっていた。それに、私たちが日本の価値観を押し付けてしまうので私が感じたようなネガティブな考え方になり、日本と比較してしまうのだ。私はこの話を聞いて自分の考えの浅さを痛感した。そして、普段の生活の中で自分の価値観を押し付けてしまっていることが多いので変えていかなければならない。

TAYAMA 日本語学校でも私の考え方を考えようと思うこととなった。TAYAMA の学生は私たちが教室に入ると同時に盛大な拍手で迎えてくれた。挨拶も大きくはきはきと笑顔でしてくれ、私たちが話す際には話し手の目をしっかり見てノートもきちんととっていた。さらに、話している間にも話し手が話しやすいように相槌やリアクションをとってくれ話していてとても気持ちがよかった。何よりも私が驚いたのは学生の積極性であった。少人数のグループであってもクラス全体の授業の時であっても積極的に質問をし、わからないことがあればわかるまで質問をしていた。日本の学校では見られないような光景であった。そして、その日の夕食の際に TAYAMA の学生数人と食事をした。たまたま私の隣に座った学生は私が受け持ったクラスの学生であった。その学生と話しているとカンボジアでは多言語話することができれば高収入を得ることができ、貧しい生活から抜け出すことができると言っていた。そのため彼は毎日必死に勉強して金持ちになりたいと言っていた。彼は将来七言語を習得しさらに建築のデザインの勉強もしたいと言っていた。私は彼らの勉学に対する意欲や生き方を学ぶ必要がある。

私はカンボジアを自分の勝手な目線や価値観で見ているためカンボジアに対してネガティブな考え方をしていた。しかし、世界には多様な価値観、文化、社会がありそれらを学び尊重しなければならない。今回の研修でカンボジアに対する価値観が変わりカンボジアの人々は陽気でフレンドリー、勉強に対する姿勢などからカンボジアには日本にはない多くの良いところをみることができた。なにより、私の勝手な考えではあるが日本人よりカンボジアの方が勉学とは別に人間として賢いと感じ、そして人生を物凄く楽しんでいるようにみえた。日本に帰ってきてカンボジア人が少し羨ましく感じた。

今回の研修で私は自分の将来自分のしたい仕事の選択肢が広がった。私はこれまで日本の製品を海外に売る仕事に就きたいと思っていたがカンボジアに行き他の仕事もしたいと感じた。私はカンボジアでは仕事が不足していると考えた。HIV の患者は HIV と仕事先でばれる

と解雇され、ゴミ山では生活を支えるために一日何時間もお金になるようなものを探す、孤児院の子供達は孤児院を卒業したあと就職できなければどのように生計を立てていくのか。このように様々な問題があるがこの人たちに見合った仕事があれば少しでも裕福な生活ができるのではないのか。今カンボジアが発展しているためこのままだと貧富の格差が広がっていく一方である。それを防ぐためにも仕事を作り貧困層の底上げをしなければならない。そこで、私はカンボジアだけではなく発展途上国で仕事を探している人々の手助けをしたいと思います。これが成功すればミクロにもマクロにも良いことである。そして、よりカンボジアが豊かで活気が溢れる国になるだろう。

最後に、今回の研修で最高の仲間巡り合うことができた。初めは不安も多く、仲良くできるかわからなかったが八日間が一瞬で過ぎるくらい早く時間が過ぎた。毎日腹が痛くなるくらい笑い、語り合った時間がなによりも心に残っている。私は本当に仲間に恵まれていると感じた。

そして、研修生の一人が言っていたがガイドの方に「カンボジア人は何を大事にしているのか」と聞くと「家族、笑顔、フレンドリー」と答えてくれたと言っていた。この言葉を聞いて私がカンボジアを好きになった理由を分かった気がする。そして、ますますカンボジアが好きになった。ガイドのおふたり、運転手さん、引率のおふたり、研修生の皆さん、カンボジアでお世話になった皆さん本当にありがとうございました。この研修に参加して本当に良かったです。みんなオーケン！

【こんなに豊かなカンボジア】

武庫川女子大学文学部 4年生

私は JAPF に参加する前、カンボジアのイメージといえば、「アンコールワット」そして「貧困」、「孤児」等のマイナスなイメージであった。いわゆる孤児院ツアーに参加を考えていた時期もあったくらいで、とても「豊か」なんてキーワードは思いつかなかった。しかし実際にカンボジアの現状を見たり、過去に起こったことを聞いたりしたことで、これまでの自分の考え方は少しずつずれていたことに気づかされた。

まず、カンボジアに対するマイナスイメージである。確かに都市部を外れるとゴミが散らばり、道路状況はかなり悪い。金銭的な面でも日本と比べれば貧しいのだろう。しかし研修に参加していくうちに、カンボジアには豊富な資源があり、食料自給率は大変高いということを知ることができた。町は活気とエネルギーであふれていて、なにより将来国を支える子ども数が多い。

課題が多くあるのは事実かもしれないが、過去や現状を十分に知らないまま、一概に「貧しい」「かわいそう」等というレッテルをはって、私はこれまでカンボジアを捉えていた。そのためマイナス面しか目に入らず、理解も深まらなかったのだろう。このツアーで日本中心のもの見方や意識が少しずつ変化していくことを実感し、新しい視点でカンボジアを見ることができたと感じる。

また、支援の在り方についても考えさせられた。日本には孤児院ツアーや、学校建設のボランティア等が数多く存在している。「子ども達のために何かしてあげたい。」という参加者の思いには私も共感する。ところが、私たちが孤児と交流をして、その時子ども達が楽しんでくれたとしても、期間が終了すれば孤児院はまた元の環境に戻ってしまう。学校を建設しても、カンボジアは教員の数が完全に不足している。これは本当に子どものためになる活動で、日本人のすべきことなのだろうか。

実際に現地を訪れ「知る」ことを繰り返していくことで、カンボジア人のニーズについて深く考え、結局私は彼らに何ができるのか、と無力感で胸がいっぱいになった。

まだまだ不十分ではあるが、私はこのツアーでカンボジアについて「知る」ということができた。そんな私が微力であっても次にできることは、日本で「伝える」ことであると考え。特に日本の子ども達には、自分の経験したことを伝えるだけでなく、そこからもう一步、「何を考えるか」「どうすればいいのか」を共有したり「自分の目で見てみたい」を感じさせたりするきっかけを与えていきたい。私自身も、東南アジアに対する理解をさらに深めていきたいと思う。

視点を変えれば「こんなに豊かなカンボジア」である。まだあまり知られていないカンボジアの魅力を伝え、カンボジアの現状を日本で考え続けていくことが、この貴重な体験をした私が、今後まずすべきこと、できることであると考え。

【カンボジアで見たこと・学んだこと】

名古屋大学大学院生命農学研究科修士 1年生

学生生活も残りわずかだし、海外にも行ったことないし、何か良いツアーないかと学内の掲示板を見漁っていた時に JAPF のチラシを見つけました。カンボジア。そういえば学部 3 年生の時に海外実地研修で行く機会があったのだけれど行かなかったな。行かなかったことに後悔していたし、旅行として行くよりはスタディツアーとして学びながら行く方が有意義だろう。と軽い気持ちで参加を決めました。発展途上国なので、きっとこの経験を通して貧しくて可哀想な国という印象をつけさせて、積極的に募金するよう仕向ける事を目的としたツアーなのだろうと思っていました。

しかし、実際は異なりました。現地の人々、観光省、病院、ゴミ山、農村、日本語学校や現地の企業、キリングフィールドやトゥールスレン収容所を周り、自分の目で見、耳で聞きくことで、今まで日本でメディアを通してしか見聞きできなかった断片的な知識や偏った解釈ではなく、実際の現実のカンボジアの現状を知ることができました。

ゴミ山を漁る人々の中には、学校へ行っていなかったため他の仕事をしたくてもできない。この先どうしたいとか夢はない。と言う大人や、学校へは通っているがお金が不十分。将来は医者になりたい。と語る子供がいました。農村の学校では、せっかく学ぶ機会があっても、子供も労働力であるため退学者が多い。賃金が低いため先生が不足している。という現実を見ました。これらのことから、カンボジアでの教育問題は、経済的な問題が原因であることが分かりました。経済問題を解決するためには、カンボジアでは観光業を発達させ外貨を得るという方針が有効ということで、観光省では、観光業を盛んにするために、具体的な目標値や論理的なアプローチ法を挙げ、行動に移しているのが伺えました。支援金ばかりに依存せず、最終的には自分たちの力のみで国を発展・維持できるよう取り組む姿勢を見ることができ、非常に感心し安心しました。

一つ不思議に感じたのは、経済的に苦しい生活であるはずなのに、誰もがゆったりとし、平日であってもそこかしこで皆楽しそうに会話をしている姿でした。それもそのはずで、カンボジアは水にも食料にも困ることはない温かく恵まれた国だからです。私は今まで、勝手に貧しくて可哀想という価値観を押し付けていたのです。

このツアーを通し、私の視野の狭さを痛感することができました。1 日の終わりに行うディスカッションでも、今まで自分の中にはなかった観点や考え方、捉え方を学ぶことができました。非常に有意義な時間でした。私はこのスタディツアーに行く前に掲げた「この先日本が途上国に対してできる事を見つける」という目標は達成することができませんでしたが、それは自分の視野の狭さが原因であるように思いました。これからは、視野を広げるためには何をしていくべきか考え、行動しようと思います。

最後に、素敵な旅をありがとうございました。

【今回の研修を通じたキャリア形成】

立命館大学 2年生

私は今回の研修に参加するまではカンボジアやベトナムについてほとんど知識がなく、貧しい国という認識だけだった。しかし、それは多くの日本人もそうであると感じた。日本にいて何気なく過ごしていると興味がない限りメディアによる報道でしかカンボジアやベトナムについて知ることがない。そのため、メディアの情報を鵜呑みにしがちであり、カンボジアやベトナムについて知っていることが戦争や発展途上といった「負の印象」しか持たなくなる。しかし、実際に行ってみると必ずしもメディアの情報がすべてではないことに気付いた。例えば「幸せ」の定義についてである。この研修に参加するまでは欲しいものが手に入ることや、おいしいものを食べていると幸せと感じると思っていた。そのため、カンボジアの孤児院や貧しい農村で暮らす人は幸せではないのではないかと考えていた。しかし、実際にカンボジアで孤児院や農村に行ってみると、子どもたちはものすごく楽しそうに過ごしていて逆に私が元気をもらうほどであった。カンボジアという世界でも貧しい国にいてその中でも貧しい生活を送っている子どもたちのほうが私よりも生き生きとしていることに気づいたことにより「貧しい＝幸せではない」という自分の頭の中で考えていたものはおかしいのではないかと感じた。たとえ貧しくても日々楽しく生活することはでき、幸せと感ずることができると知った。むしろ、そういう日々の幸せに我々は気付いていないのではないかと考えた。何気なく過ぎていく日々の中にも幸せは存在しているが、その存在に気付いていない我々のほうが不幸のように感じた。

また、カンボジアやベトナムでは大きな格差社会が存在していることを知った。例えば乗り物である。現地ではバイクがものすごく多かったが車も多く走っていた。しかもそれらの車は外車や日本車がほとんどでその日本車もレクサス等の高級車が多く走っていて驚いた。カンボジアやベトナムの中心街を見るととても貧しい国には見えなかったが、一歩道から外れてみると道路は舗装されてなく家も中心街と比べみすぼらしく感じた。これが現地の現実だと実感した。平均年収が約\$1000ととても低いのにカンボジアでは自動車が多く走っていて、多くのビルが建設されている。これは現在著しい経済成長を遂げている裏で大きな格差が存在していることの表れだった。経済成長とは聞こえはいいかもしれないがその裏では格差がどんどん広がっていることを学んだ。

内戦からは立ち上がり復興しているが距離が遠い我々から見るとどうしても負の印象が強に残ってしまう。そのため、海外について関心を持つ重要性を知った。関心を持ち、それらの国について正しい情報を知ることがその国にとっても大切なことであると考えた。そのため、今後は海外に目を向け様々な国について関心を持ち、それらの情報を発信していきたいと考える。海外に行っていない人に現地の情報を発信し、第三者から見た印象を変えていけるようなキャリアにしていきたい。

【カンボジアスタディツアーに参加して】

大阪大学法学部国際公共政策学科 1年生

「カンボジアって何があるの？」

「うーん、アンコール・ワットとか…かな？」

ツアーに参加する前は、本当にこの程度しかカンボジアについて知らず、カンボジアについて深く考えたこともなかった私に、今回のツアーは様々なことを気づかせ、考えさせてくれました。

私にとって一番大きかったのは、価値観の違いというものを、肌身をもって感じられたことでした。渡航以前から価値観の違いという言葉を使っていたけれど、やっとこの言葉の本当の意味を理解できたような気がします。KURATAPEPPERの倉田さんによる、アリとキリギリスのお話。アキラさんが地雷に関する経験談をされている間中、笑顔であったこと。他にもふとした瞬間に、日本とカンボジアの間にある価値観の違いを感じました。自分のものさしでしか物事をはかることができていない自分に、気づかされました。

価値観の違いというものを体感してからずっと考えていることがあります。「カンボジアは発展途上国、という枠組みでとらえられるけれど、はたしてそれは適切なのか？」ということです。先進国と発展途上国という枠で国を大別する場合、「先進国」は「発展途上国」よりも政治・経済面等あらゆる面で進んでいる国で、「発展途上国」は先進国を見習い、発展を目指すべきだというニュアンスが含まれているように感じます。矢印の先に位置するのが「先進国」で、矢印の棒の部分に位置し、後塵を拝しているのが「発展途上国」というわけです。ここでは貨幣経済を基盤とする資本主義社会が前提となっています。

しかし、実際に現地の生活を見聞きし、人々とふれあう中で、カンボジアが「先進国」よりも進んでいない、「貧しい」国だとは思えませんでした。確かに一日何ドルで生活しているかとか、貧富の格差とかの点で見ると貧しいかもしれません。ですが、農村での人々の暮らしは、貨幣経済にそれほど縛られていなくて、地に足つけた穏やかで豊かなものでした。日本語学校や孤児院、ゴミ山等で出会った子たちは、みな勉強への強い熱意を持っていました。そして、人々は「笑顔・家族・フレンドリー」という、日本人が日々の生活で忘れかけているものを、大切に生きていました。ある意味、「先進国」日本よりも、「進んで」いるのではないのでしょうか。視点を変えることの大切さを実感しています。

今やもう、電車で一分一秒を争うような生活に戻ってしまいましたが、カンボジアでの気づきや学びを大切にして日々を過ごしていきたいと思います。まずは、子供たちの学習意欲から。もっと世界のことを知りたい。世界が抱える問題を、少しでも解決する手助けをしたい。そのために必要な勉強もしたいし、見聞も広めたい。勉強ができる環境に感謝し、周囲の人々を大切にしたい。笑顔を忘れずに目標へ向かうという姿勢を忘れないようにしていきたいと思います。

【カンボジアという国を学んで】

久留米大学法学部法律学科 3年生

このツアーは私にとってたくさんの学び、出会いの詰まったスタディーツアーでした。まず初めに参加するにあたって私なりの目標を立てて挑みました。それは「カンボジアに住む人々の幸せ」に焦点を向けてカンボジアという国を学ぼうという目標です。カンボジアに入国してまず感じたことは、想像していた国のイメージと違い、貧しく静かな国という考えでしたが日本人が勝手に持っているイメージだとスタートから考えを改めさせられました。日本という世界的にもとても平和な国で毎日何不自由なく生活し他の国にあまり興味をもたないからこそ間違った考えを持ってしまうのだろうし、実際にその国に行って、見て感じることでリアルを知れたことは研修に参加した意味がありました。カンボジアに住む人々には笑顔が溢れていて、バスに乗っていてもニコッと笑い手を振りカメラを向けると気さくにポーズを決めてくれ、孤児院や日本語学校、ごみ山を訪れそこで子どもたちに話を聞き触れ合う時間では元気の良さややる気の勢いに圧倒されたことは忘れないと思います。孤児院やごみ山で生活する子どもたちは私たちが経験したことがない過去や現在を生きていて、日本人がその話・生活の内容を聞くと私たちは幸せな方だと考えるはずですがカンボジアの人々は全く自分のことを不幸とは考えていません。「私たち日本人が日本に住んでいるからこそ価値観とカンボジアに住んでいるから持つ価値観は違い、何が本当の幸せか一様には言えない」そのことを Kurata ペッパーの倉田さんの話で教えていただきました。

「カンボジアの人々の幸せ」について一番考えた時間はごみ山に住む子供に話を聞いた時でした。

私をごみ山で仕事をしていた男の子に「どんな時が楽しく幸せか」聞いた時に、その子は「学校に行き勉強し他の子より成績がよく先生や親から褒めてもらえた時」と教えてくれました。私は学校に行き成績がいいからと言って幸せという感情を覚えたことがなかったですが、つい最近まで暗い歴史をたどっていたカンボジア、そこに住む人々はそのつらい時代を乗り越えてきたからこそ、学べることができる環境、家族と当たり前で暮らせる環境の有難さは彼ら彼女らだから感じることでできる素晴らしい幸せなのだと感じました。それと共に私たちにとっての当たり前が素晴らしい幸せと思えていないことがもったいなくも思えたし情けなく思えました。

この研修に参加した7日間はとても短い期間でしたが、研修の仲間にも恵まれ刺激を受けここに文で表せないほどの学びを得ました。まだまだ日本に住む私たちも今に満足することなく当たり前を当たり前だと慢心せずカンボジアに住む人々、国を見習っていくべきだと感じましたし、幸せの意味についてじっくり考えることのできた素晴らしい研修でした。本当にありがとうございました。

【カンボジアでの一週間】

名古屋大学文学部 3年生

カンボジアの地を踏みしめた瞬間頬に感じた、夏の夕暮れの風。ノスタルジックな気持ちでプノンペン市街を見つめてみると、そこにはいつかテレビ番組で見たようなエネルギーな東南アジアの光景が広がっていた。未舗装な歩道でダーカウに熱中する青年たち、所狭しと並べられた電化製品の中でお昼寝する店主、家族全員で一台の小さなバイクに乗り疾走する姿。当たり前でないものが当たり前、これがカンボジアの人たちにとっての日常風景なのだ。そこには、かつてあった残酷な内戦の傷跡を感じる余地などなく、今を生きる彼らの姿があった。トゥールスレン収容所やキリング・フィールドといった場所が伝え続ける決して忘却してはならない過去、それと対置する形で今を精一杯に生きるカンボジアの人たち。最良の未来を導くための両者の帰着点をどこに付すべきなのだろうか。

今回私が設定したツアー目標は「たくさんの価値観に真摯に向き合い、自らの中に生涯変わることはない生きる軸を確立する」。異なる環境で生きる人たちの人生を客体化することなく、自身と同じ土俵に引き寄せて考えることを心がけた。CCH 孤児院で出会った子どもたちの無邪気な笑顔、その夜にディスカッションした「孤児院は孤児問題を解決するか」という問い。眠い目をこすりながら必死に考えても答えなどでなかった。答えのない問いに満ちた社会。その中で私たちはどう生きればよいというのだろうか。「本当の支援とは何か」という問いに答えを濁らした倉田さんの苦笑いも、治る見込みがないと分かっているながらも、元気になったら普通の人と同じように暮らしたいと小さく微笑んだ HIV 病棟の元運転手さんも、それぞれの悩みを抱えながら生きている。「孤児」、「起業家」、「HIV 患者」といったカテゴリーではなく、等身大の彼らと対置したとき、私自身と何も変わらないひとりの人間としての彼らがいる。

様々な過去を背負いながら未来を志向し、今を精一杯生きる人たちがふと漏らす笑顔は本当に美しい。ゴミ山で出会った少年とおばさんたちが笑顔で会話する光景を、貧困という言葉で片付けることはできない。農村で鬮鶏に興じる住民たちの姿に経済格差という言葉は無用であると感じる。何が幸せで何が不幸かなんて、他人が勝手に決められるものではない。何かを得れば何かを失う。今後経済発展するカンボジアで何が得られ何が失われるのだろうか。帰国した日本の整然とした街並みを見つめながらふとそんなことを考えていた。

様々な目的意識を持った仲間と過ごした一週間は今まで過ごしたことがないほど濃い一週間であった。この経験はこれからの人生において一種の羅針盤として機能するように思う。答えのない問いに満ちた社会で自らの行き先に迷ったとき、カンボジアで出会ったすべての人の笑顔が、JAPF の仲間たちの声が、そつと後押ししてくれる。「あなたの中の最良のものを、世に与えなさい。蹴り返されるかもしれませんが、でも気にすることなく、最良のものを与え続けなさい」。私の好きな言葉だ。結局答えなんてわからないし、論理だった人生を送ることなんてできないと思う。生きる軸だつてぶれぶれかもしれない。それでも、それなら、自分が最良だと思う感覚を信じて、この羅針盤をフル活用して、精一杯今を生きたい。世界を変えることと同じくらい、自分を変えることは難しい。それでも挑戦し続けた。自分にとっての最良を目指して。

【この12日間で学び得たことを何かしらの形で将来に活かす】

関西外国語大学外国語学部 3年生

小学3年生の夏休み。私は、調べ学習の際に立ち寄った図書館である本と出会いました。それは、食べるものがなく、また同時に 病気になっても治療を受けることができない世界の子どもたちについての本でした。

世界には私と同じくらいの、いや、それよりも小さい子どもたちが今この瞬間、飢餓や病気で苦しんでいる。何ひとつ不自由なく暮らしている、生きている私にとってその事実は大変衝撃的であり、忘れることができませんでした。

“いったい私にできることは何なのだろうか。何を彼らにしてあげられるのだろうか。”

月日が経つにつれその思いは日に日に増していき、ボランティアや NGO、NPO といった言葉を見ただけで私も一緒に参加したい、活動したい、と常に思っては本やインターネットで調べました。また、あるときは発展途上国で生きる子供たちのために募金を集める、学校を建てる、といった学生団体の話も聞きに行ったりもしました。どの方も本当にその国の、その人々のために思って懸命に活動をしていましたが、どこか私の中では腑に落ちないところがあり、実際に活動するまでには至りませんでした。

そのような折に、このツアーの話聞き、多角的に様々な場所を訪れ、“間接的に”ボランティアのあり方を考えるといった内容に惹かれ、悩み悩んだ末、この度参加することに決めました。そして、ずばり この12日間を通して心から思ったことは、本当にこのツアーに参加して良かったということです。今までの考え方、ものの見方を180度かえるものでした。ベトナム、カンボジアの都市部では、驚くほど店も多く、交通も発達し、中には高級な建物も見受けられましたが、ちょっと中に入ると 裸足で歩いている子やごみを拾っている子などがおり、貧富の差を肌で感じました。けれど、その中には顔を汚してまで遊ぶ、子どもたちのきらきらとした笑顔もありました。私たちの国、日本は欲しいものがすぐに手に入る、豊かな国です。しかしその一方で、心を病んでいる人がどの国よりも一番多い国であるとも感じます。ベトナムやカンボジアは日本やアメリカといった先進国よりは教育、医療、その他の面で貧しい国かもしれませんが、もしかすると どの国よりも一番“心が”豊かな国かもしれません。私たちの住む世界が“豊か”であるがゆえに、その基準で価値を見出し、ハード面、ソフト面すべてにおいてあれが足りない、これが足りないと支援をする。けれど、本当にその人たちのためにその支援は成り立っているのか。それは、ただの自己満足で終わってはいないか。本当の意味での支援とはどのようなものなのか。そして、本当の“幸せ”とはいったい何なのかについて考えさせられました。

私はこのスタディツアーを通して、様々なことを、研修で、一緒に行ったみんなから学びました。初めに宿題で課せられたものの中に、このツアーの“目標”というものがありました。私はそれに対して、「この12日間で学び得たことを何かしらの形で今後、将来に活かす」という目標を掲げました。けれど、この目標はこのツアーが終わった今もこの先も人生が続く限り、答えることも100%達成することもきっとないでしょう。だからこそ、私はこの答えに対して、考え続ける態度、姿勢を今後も持ち続けていこうと思っています。

このような素晴らしい体験、そして人々に巡り逢わせていただき、本当にありがとうございました。

【カンボジアで得たこと】

甲南大学経営学部 2年生

今回の JAPF のカンボジア研修によって得られたことは、たくさんあるがここでは、大きく二つの点を挙げる。まず、一つ目は教育の重要性である。今回の研修に行くにあたって事前学習でカンボジアの教育問題を調べたり、実際に現地の方からお話を伺う中で強く感じたのが「教育が国家を作ること」である。カンボジアは、ポルポト政権時に知識のある大人がことごとく殺され、知識を持たない子供が多く残ったが、知識がなくては国家を運営することはできないし、他国と対等に渡り歩くこともできないし、産業を発展させることも難しいし、企業を起こして外貨を獲得することも難しい。現に、首都のプノンペンでさえ交通ルールが守られておらず、それを取り締まる政府もあまり機能していないように感じたし、カンボジア政府に国家をしっかりと運営する力がないとも感じた。そして、何より教育を受けておらず、知識がなくては、自分で判断、意思決定をすることが難しい。だからカンボジアの支援として真っ先に重視されるのが教育の支援なのだということが今回の研修で私はわかった気がする。私は、今まで当たり前のように教育を受け、当たり前のように小学校から大学まで来て、なぜ教育を受ける必要があるのかとか、親や国もなぜ教育に力を入れようとしているのか考えたことがなかったが、「教育こそが将来の国を作り、未来を支える大きな武器となるのだ」ということをこの研修で学ぶことができた。この気づきは、自分にとって大きなプラスになると思う。教育を受けることの重要性を理解しないで教育を受けるのと、理解して教育を受けるのでは違うだろうし、教育の重要性を感じた今、敷かれたレールを歩くのではなく、レールから外れたことをするのが正しいとも思わないが自分に何が足りていないのかを考え、足りていない部分を補うためならレールから外れたことをしてもかまわないと思う。

また、次に学んだこととしては価値観の多様性である。特にそれは、KURATA ペッパーを訪問して倉田さんのお話を伺う中で学んだ。カンボジアを貧しいとみている人が多いが、見方を変えると自給率 100%で、食べ物が豊かで、冬は来ない、地震もない天国みたいな国だともとらえることもできる。価値観の多様性を認めることで戦争はなくなるという倉田さんのお話にはとても共感した。本当に私もそのように思う。私はカンボジアの抱える問題を考える際に、どうしても日本の場合はどうだったかとか日本と比べてしまうことが多かったが、それではいけない。カンボジアには、独自の文化・考え方・やり方があり日本人の価値観で考えては現地のことを本当に理解することはできないのだ。これは、カンボジアを見るときだけでなく、カンボジア以外の国を見るときも同じことが言えるだろうし、一つの国の中でも価値観が違うことがあるということも認識しておかなければならない。また、価値観の多様性ということを考えるにあたって、大虐殺や人権侵害を行ったポルポトや核やミサイルで問題になっている金正恩を支持するつもりは全くないが、彼らの行動がただただ間違っているとしかおかしいと言って、切り捨てるのでは問題の本質は解決せず、またこれから先争いが生まれるかもしれない。核やミサイル開発を行う金正恩だが、本当は何か重要なメッセージを発信しようとしているのかもしれないし、アメリカ側の一方的な立場から意見をいうのではなく、相手の立場に立って相手の価値観・考え方を尊重することも時には必要だと思う。これもまた一つの価値観の多様性なのかもしれない。

今回のこの研修の目標は、「カンボジアに貢献できることを見つける。東南アジアの活気に触れ、その先の未来を感じる」であったが、現段階では、自分自身カンボジアに何も貢献

できないと思う。しかし、カンボジアという国はゴミ山や農村と都市の格差、農村の教育問題など多くの社会問題を抱えているが、子供が多く、活気がありとても大きな未来がある国で、こういった社会問題も将来乗り越えられるパワーを持つ一方、まだ国の制度をしっかりと整える必要があったり、他国の支援が必要だとも感じた。その中で、これから先自分がカンボジアに貢献できることはないか模索していきたいと思う。そして、最後に多くの学ぶ機会、考える機会を与えてくださった JAPF の方々ありがとうございました。

【8日間で感じたこと】

北九州市立大学 1年生

「カンボジア＝アンコールワット」。それだけではありませんでした。というよりむしろ、アンコールワットはカンボジアのほんの一部でしかありませんでした。観光地としてのカンボジアだけではなく、実際にそこに住む人々の暮らしや歴史を学ぶことができ、本当に良かったと思っています。

シェムリアップの農村に行ったとき、カンボジアは豊かな国だということを目で見て実感できました。日本にいるときの感覚で見るとトイレもないし発展していないようだけど、農村にはあちこちにバナナなど果物の樹がありました。カンボジアの食料自給率は100%です。食べ物があって家があって音楽と笑顔のある生活、それだけで十分幸せ、素敵だなと思いました。ただ、教育はまだです。小学校を卒業できない子供も多いと聞きました。親世代が教育を受けていないから、大きくなったら「働いて。」と言われてしまうそうです。今学校で教育を受けている子供たちが将来の夢を見つけられることを願っています。そして彼らが大人になったら子供たちを学校に通わせてあげてほしいし、そんな風に教育が広まっていけばな、と思います。

カンボジアの人たちは笑顔がものすごく印象的で、とくに子供たちの笑顔が眩しかったです。孤児院ではほんの少しの時間しかいらなかったのに帰り際「また会おうね。」とハグをしてほっぺにチューしてくれて、いつまでも手を振ってくれていて、たまらない気持ちになりました。私たちが帰ったあと子供たちは寂しい思いをしたかもしれません。私も少し寂しかったです。だけど実際に会って遊んで、お互いを身近に感じることを考えると、いい経験になったなと思います。

研修を通して今まで知らなかったカンボジアのいろんな面を見ることができたし、研修中には気付かなかったことも、毎晩のディスカッションがあったおかげで考えることができました。研修中のみんなの質問やディスカッション中の意見、どれも私の中にはなかった良い観点からのものばかりで、とても刺激になりました。こんな機会って本当はないと思います。心から尊敬できるたくさんの仲間に出会うことができました。初めて参加したのがJAPFのツアーでよかったです。今はカンボジアやアジア全体に対して、前より何倍も興味があります。一回行っただけでは分からないこともたくさんあったので、今アジアに行けるツアーやボランティアを調べています。

これからもっとたくさんを知りたいし、身の回りのことにもっと関心を持って生きていきたいです。このツアーがきっかけでした。ありがとうございます！